

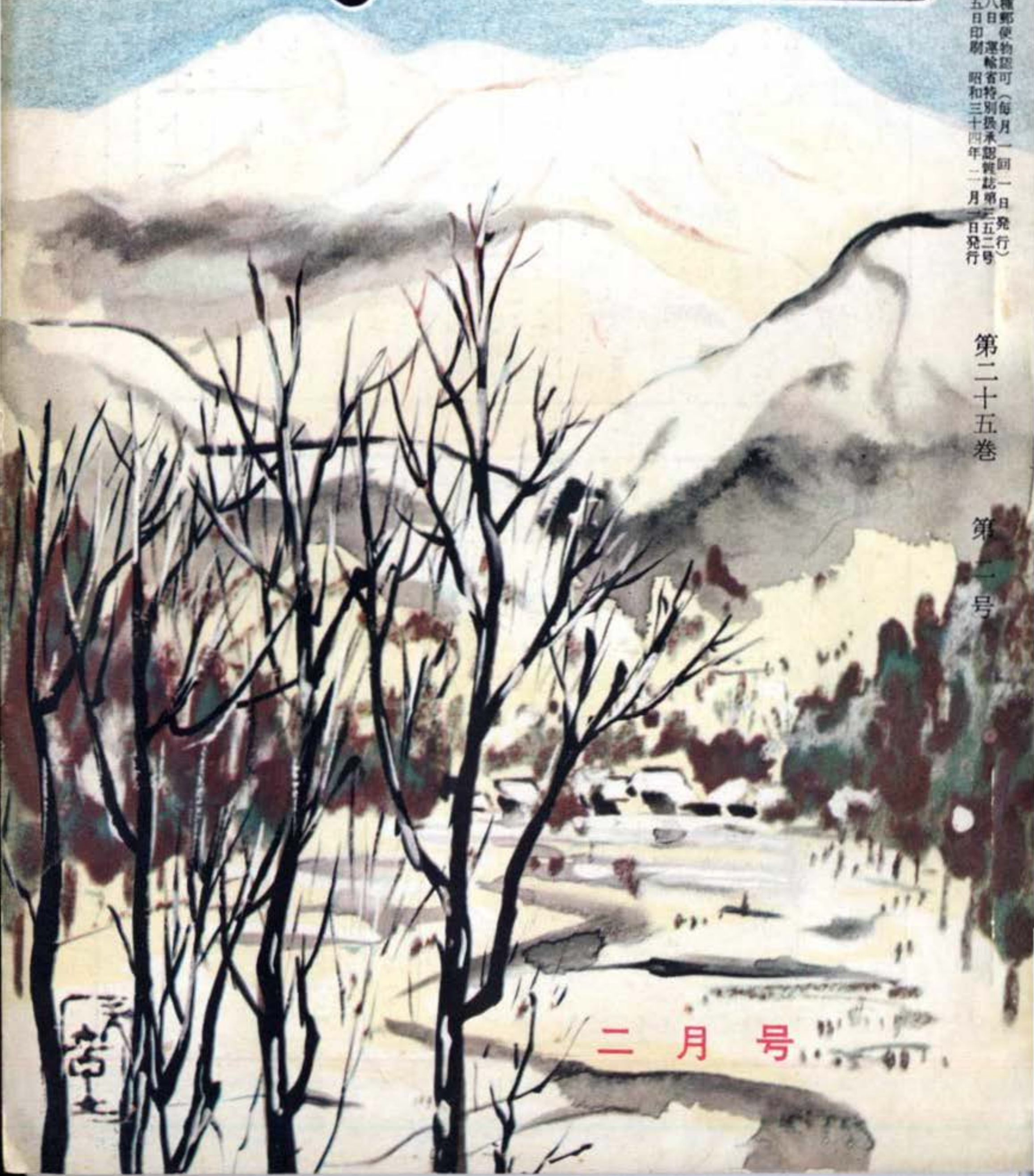
浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省特別換承認誌第三五二号
昭和三十四年一月二十五日印刷 昭和三十四年二月一日発行

第二十五卷

第二号

二月号



新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円八八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円八八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやまとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二二八七番

浄土二月号目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

ね は ん (2)

法然上人私見 福井康順 (4)

獄中で両親を探し求める 林 靈 法 (12)

はだしの国インド 齊藤昭俊 (9)

実話暴力の船 吉野翠幹 (17)

童話 お日さまの子 きりふちてるを (34)

こころの茶椀 竹中信常 (22)

—— 信仰のあり方・その二 ——

浄土歌壇 岩野 喜久代 (27)

勸募日記 A M (39)

元祖法然上人 (28) 二月の経文 (33)

扉の御法語 (20) 新規会員紹介 (38)

童心仏心 (16) 支部通信 (41)

真理の花たば (2) 佐藤良智 (30)

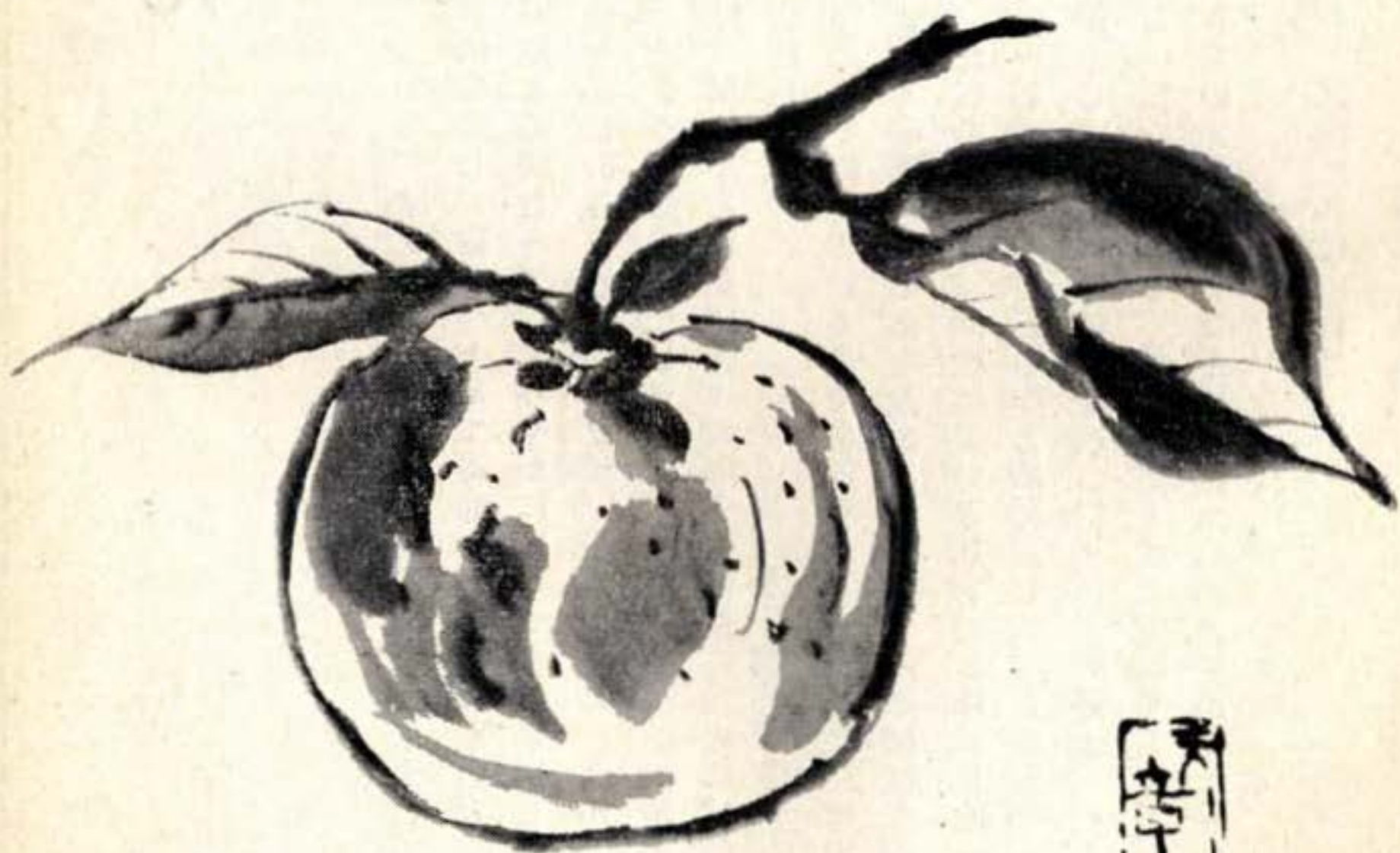
—— 若き女性への仏教入門 ——

浄土

二月号

南無阿弥陀仏なむあみだぶつといふは、別
したる事には思ふべからず。
阿弥陀ほとけ我をたすけ給へ
といふことばと心得て、心こころに
は阿弥陀ほとけ、たすけ給へ
とおもひて、口には南無阿弥
陀仏と唱となふるを、三心具足さんしんぐそくの名
号と申なり。

法然上人御法語



ね は ん

かように、わたくしは聞いた。

「わたしはいま、病いが生じ、痛みが甚だつよい。しかし、諸々の弟子に最後の遺誡をのこさずして、涅槃に
はいることは、わたしにはふさわしくない。いままさに精勤し、自らつとめて寿命を留めねばならない」と。

世尊は、静かに室を出でて清涼の処に坐られた。阿難この姿をみて、すみやかに近かづき仏に申しあげた。

「世尊よ、いま尊顔を拝するに、病に耐えられて健やかに御見うけいたします。世尊の病いが重かったとき、
わたくしの心は、悲しみと憂いに、あたりが暗くなったような気がいたしました。だが、しづかに熟慮したと
き、ふと、如来は滅せられないと思ひました。それは、何故かといえは諸々の弟子や僧伽のために、最後の教誡
がなされていらないからです」仏は、阿難にかように告げられた。

「阿難よ、わたしに、比丘僧伽は、なにを教誡することを期待されるのであろうか。わたしは、すでに内外の
区別なく、ことごとく法を説いてきた。如来は、差別なく平等におしえを説きあかして、そこには微塵の秘密も
ないのである。わたしは、すでに歳八十を迎えた。たしの身体は、同様に老いと病いの故障に悩まされてい
る。いま、方便力をもってしばらく、寿命をとどめているのである。自らつとめ精進して、この苦痛を耐え忍ほ
う。されば、阿難よ、まさに、自らに帰依し、法に帰依して、他に帰依しないがよい。阿難よ、自らを燈明と
し、法を燈明とし、他を燈明とせず、自らを依処とし、法を依処とし、他を依処とすことなくして、わたしの滅
後、たゆみなく精進をつづけ、修養おこたることなきものあれば、まことに、わたしの弟子のなかにおいて、最高
処にあるものと云えよう。」

そのとき、世尊は、クシナーラーの沙羅園のいたり、阿難に告げられた。

「わたしはいま、背の痛みが甚だしい。沙羅の双樹の間に、頭を北に、首面を西方に向けて床を敷いてほしい。それは、わが法が、北方に流布して、久しくさかんに住するからである。」ときに、世尊は、右脇を下にし、師子王のごとく足をかさねて臥して安静にされた。そのとき、沙羅双樹には、時ならぬ花が咲き、仏を篤く信ずる鬼神たちが、香華を如来のからだに降りそそぎ、微妙の音楽が奏でられた。そのとき、世尊は、阿難に告げられた。「この双樹の神は、非時花をもって、わたしを供養した。しかし、これは如来を供養することではない。まことに、如来を供養するということは、人びとが、よく法を聞きて、よく法を行ずることが、この上もなく、如来を崇め、尊び、供養することになるのである。」このとき、阿難は、悲しみの涙を止めどなく流した。

「わたしは、深い仏恩を蒙りながら、いまだに学び得ず、行じ得ずして所業が成就しないうちに、仏は滅度されてしまう、噫々」仏は、阿難に温情ふかく説かれた。

「阿難よ、憂うるな、悲しむな、慟くことをやめよ。なんじが、わたしに待して以来、態度にも、言葉にも、心にも、慈愛深さがあふれていた。なんじが、わたしに供養した功德は甚大である。さらに精進するならば、成道も真近かであろう。わたしの滅後は、教法と戒律とが、師として存するのである」さらに、仏は告げられて、「なんじ等、仏、法、僧のことにおいてまた道のことについて、疑いあれば問うがよい。わたしの亡きあとに及んで、後悔するようなことなく、いま現存するうち尋ねるがよい」と。

仏、再び三たび告げて問われたが諸々の比丘たちは默然としていた。阿難は、仏に申して言った。

「世尊よ、まことに稀有のこととあります。わたしは、この比丘僧伽は、もはや一人の比丘といえども、仏、法、僧の三宝についてまた道について、疑いも、惑いものこそすものはないと信じます」

仏は、その言葉をふかくうなずき、諸々の比丘にむかって静かに告げられた。

「なんじ等、観ずるがよい。如来がこの世に出ずること、優曇鉢花の時に一現するがごとく、全く稀有のことである。諸行は無常にして、滅せざるものはない。されば、なんじ等よ、放逸なることなくして、精進するがよい。一切万物に常在するものはない。怠ることなく、勤め励むがよい。これが、如来最後の言葉である」と。

法然上人

私見

福井康順

一

法然上人のイメージを想う時、直ぐ出て来るものは、よく画像などに見えるかの「和顔愛語」そのままの温容である。

「柔和忍辱の相」とは、まさにこれであろうか。

上人には、人も知るように幾つかの大師号があり、在世滅後にわたって幾つかの尊称も伝えられている。しかし、最初の勅諡である円光大師というのが、私には一番好きである。

上人は、勢至菩薩の化身である、と伝えられている。そして、勅修御伝巻九によれば、九条兼実は、上人の足が、「地をはなれて、虚空に蓮華を踏み、うしろに頭光の現じて」い

る姿を見た、という。いわゆる頭光踏蓮の奇瑞である。この物語は、源空私日記にも古今著聞集その他にも見えていて有名であるが、太った少しく前こごみの上人を見送っていた兼実の眼には、その丸い肩の上に、丸い円光が揺曳している奇瑞をば靈感したものであろう。見送られるものと、見送るものの。その間には、法悦の喜びが、心から心へと流れて、上人のうしろ姿は、まさに円光大師の名にふさわしい、と観ぜられる。

慧成大師とか明照大師とかいう大師号は、字面の上からして、智慧の光りが光りすぎているようで、どうも私には親し

めない。これでは、「学生骨になりては念仏や失はれずらん。」と戒め、かの一枚起請文の末尾に、「智者の振舞をせずしてただ一向に念仏すべし。」と断じている上人の面影ともピッタリして来ないようである、——とは、単に私だけの俗眼であろうか。

上人の歌には、かの「月かげの至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞ住む」がある。続千載集にも入っている有名なものであるが、これに対して、人は直ちに方丈記の末にある「月影の入る山の端もつらかりき、断えぬ光を見るよしもがな」を想い起こすであろう。どちらも不断の光り、弥陀の光明を願求する心に繋がっているものであるが、上人の歌は、いうまでもなくそこに題してあるように、「光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨の心を」よんだものであり、同時に選択集の第七章に、「弥陀の光明、余行の者を照らさず、ただ念仏の行者を攝取し給ふ。」とあるのに相応するものであり、そして、また、上人の消息に、「念仏にはまたく別の様なし。ただ申せば極楽に生まるとしりて、心を至して申せばまいる也。」とあることもと相応じている。

私には、「月かげの至らぬ里はなけれども」というこの歌の歌い出しに、上人の温容の、ほのぼのと浮かび出して来ることを感ずる。

しかし、上人の温厚さは、もちろん単なる温厚さのみではない。外柔内剛のそれである、と感じられる。上記の歌の「なけれども」には、上人の謙虚な、受け身な心構えのほどが浮かんで来るのであり、「眺むる人の心にぞ住む」といい切っているところに、上人の信仰に徹し切っているその態度の強さのほどが窺われても来る。おもえば、「学生骨になりては」という訓戒は、内剛のほどを示していて余りがある、というべく、特に、かの配流に際して弟子に告げた、と伝える上人の語、例せば、都よりは「辺鄙におもむきて、田夫野人を（念仏に）すすめん事、年来の本意なり。」といい、或は、「われたとひ死刑にをこなはるとも、この事はすばあるべからず。」と伝える言葉などは、いよいよこの事実を表わしている。

剛の一字は、上人の御一生を通じて、——（否、信仰に徹した教団の元祖と仰がれる人々は、皆な）もっているいわば特質なのである。それを全く「柔」でもって表向きは包んでいるところに法然上人の人柄がある。上人のイメージが、柔和忍辱であるゆえんである。

二

上人が温厚であった、ということは、上人の念仏流通の上

には、大きなプラスであった、ということ忘れてはならない。当時の事態下にあつて、上人が「新義」の念仏の行者であり得た、ということは、上人の人柄においてこそ行われ得た、と考えられる節が多い。

このことは、初期浄土宗教団の成立を考える上には、常に心しておくべき大事なポイントである。

上人は、長い八十年の生涯を通じて、決して他と敢えて争うことはやっていないようで、上人もまたその晩年を除いては、他からして著しい厄難を受けてはいないことが注意される。むしろ、天台宗の顕真や聖覚などは、人も知るように気易く親しく上人と来往している。

上人は、特に山門に対しては、温厚のようである。常に実に柔順である。このことは、人も知る元久元年十一月の七箇条起請文と送山門起請文とを見れば容易にわかるであろう。また、承元三年六月に配流の地から光明房に宛てた、という一念義停止起請文も強く参考される。

上人のこうした柔順さを目して、人は、山門その他の弾圧に対する妥協であり、むしろ媚態であり、或は偽装である、などともいう。しかし、私は、断じてそうは思わないのである。そうした作為をする上人である、とは、私には思い得ないからである。一念義停止起請文に、上人が、「貧道之を秘

して偽って此旨を述べ、不実の事を記さば、十方の三宝、正に知見を垂れ、毎日七万遍の念仏、空しく其利益を失はん。」と強くいい放っている態度も想起される。

上人にすれば、南都や北嶺の皆さん方は、聖道門、自力である。自分の方は、浄土門、他力、しかも専修念仏に立っているもの。されば、皆さん方と自分の方とは、立場が違うのである、——という心構えに立って、その温厚な性格からして、真に心の奥から、経にいわゆる柔和であり、善順であつたのであらう、と考えられる。

実をいうと、上人の教線は、南都北嶺のそれとは、その階層において非常に違っていた、ということは、注意されなければいけない。上人の主たる対象が、「朝」ではなくて「野」であること、「貴」ではなくて「賤」であつたこと、を忘れてはならない。要するに、庶民中心であつたわけで、かくて、御伝卷三十一の「上人の勸化、一朝にみち四海におよぶ。」などというのは、実は文飾であらう。(或は、この場合、上人とかの関白兼実との交渉が問題となるかも知れない。そして、人も知るように、このことについては、世に論議が多い。しかし、私は、すでに一二の学者たちもいうように、兼実が、上人をもつて専修念仏の師として仰いだのは、実は上人の晩年のことであり、一方、上人の化導は、あくまでも庶

民中心であった、と解したい、と思う。」

登山状は、聖覚法印に筆をとらしめたものであるが、それは、御伝卷三十二によると、上人の念仏の、「無智の道俗男女」のものであって、他の「諸宗のさまざまとなるべからざるむね」を示さんがために書かれている、というのである。

即ち登山状には、「そもそも一代諸教」は、「いづれも生死解脱のみち也。念仏を修せんものは、余行をそしるべからず」といい、「余行を修せん物も念仏をそしるべからず」ともいつている次第で、そして、こうした立場は、上人の思想の上に、幾らも見出されることでもある。

人は、上人の選択集にいわゆる捨閑闍抛をもって、直ちに他宗に対する上人のいわば折伏であり化導である、かのようにも解している。日蓮上人が念仏無間地獄抄に、法然上人について端的に記して、上人は「難行聖道門をば閉ぢよ、之を抛て、之を闍け、之を捨てて浄土門に入るべしと勧めたり。」というそれである。

しかし、私見をもってすると、それは違う、と考えられるのである。

もちろん、捨閑闍抛は、聖道門に対する法然上人の挑戦である。新興法然義の宣言でもあろう。しかし、選択集は、晩年の述作である、とされており、且つは、隆寛大徳や証空大

徳などの行状の上について伝えられているように、上人の在世中は、秘して披露せしめずに、内々に伝えられて行った、と思われるからである。即ち上人は、表向きにこの化導の方法を打出しているものではないのであり、結局、他宗とは対決を敢えて試みてはいないのである。

上人の思想について考える場合、上来の私見は、恐らくは多くの論難を買うであろう。しかし、かく考えなければ、上人の言説には解しがたいところが多いようであり、全体を通じて説明に無理も出て来る、と思われるのである。結局、上人の思想と態度とは、平明に理解されないであろう。

三

上人が、非常に勉強家であり、後には大学匠であり、更に晩年になるほど「念仏の行者」として知られていることはいうまでもない。同時にひろく当時における仏教界の巨人であった、ということは注意される。即ちこの点は、親鸞上人が世に知られざる単なる「愚禿」に終っている、こととは、まさに好対照であって、法然上人の当時、梅尾の高弁上人が、「爰に近代に上人あり。」と強く対立して、かの摧邪輪を書いていることも、また、少しく後れて日蓮上人が、法然上人を眼の敵として罵っていることも、実にここに重大な関連があ

る。法然上人は、当時、目立った大きな存在だったのである。上人の「われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者、花洛の乱入のとき、ただ一日聖教を見ざりき」という述懐は有名であるが、また、大蔵經を五回までも眼を通した、という伝説も知られている。しかし、上人が、三位中将重衡のために、戒師となり、専修念仏義を説いていることは、上人の化導を知るものの、もっと広く伝うべきものであろう。

平重衡は、人も知るように、南都炎上の責任者なのであるが、最後の救いをば、わが上人の上に求めているもので、平家物語の「戒文」の条には、まず重衡の最後の願いとして、「さらば年来契りたりし聖に、今一度対面して、後世の事を申（し）談ぜばやと思ふはいかがすべき」という問答が出ている。そして、「聖をば誰と申候やらん」という問があつて、「黒谷の法然房と申（す）人也」とつづいている。そこで「平家」には、法然上人の法談が長々と説かれているのであるが、われわれは、そこに、「浄土宗の至極、各略を存して、大略是を肝心とす。」ともあることを見るのである。

さて、上人の、重衡の焼いたその東大寺の大仏殿の再興に關係していることも、ひろく人の知るところであろうが、このことについて、源平盛衰記は、「大仏造営奉行勸進の事」と題して、「東大寺の大勸進の仁、誰にか仰せ付くべきと議

定あり。当世には黒谷の源空は、戒徳天に覆ひ、慈悲普くして、人等つて仏の思（ひ）をなす。」といっている。この文の点線の部分は特に注意ありがたいが、上人をば「仏の思（ひ）」で仰いでいることは注目される。しかし、上人は自行の妨げとなることをおもつて、かの俊乗房重源を推挙しているわけ、この重源が即ち大仏勸進の業をしとげているのである。芝居で御馴染みの弁慶が読みあげるかの勸進帳は、この「俊乗房重源、敬つて曰す。」で終っている。

最後に、法然上人と平家物語と（従つてその異本ともいうべき源平盛衰記と）の關係については、上記のことどもの外になお興趣のある幾つかが数えられる。即ち「平家」の原作者を考える時、私は、世に定評のある信濃前司行長説よりもむしろ法蓮房信空の存在を強く注意するのであり、また、聖覚法印も大きく關係して来る点がある、と考えたいものなのである。そして、私見をもつてすれば、今の「平家」は、法然上人の門流の手に出ている、と見たいのである。この見解には、しかし、従来、何人もが想到していないようである。詳しくは別の機会に開陳したいと思う。

（本稿については、「印度学仏教学研究」五卷二号と「宗教研究」一五〇号の拙考を参照されたい。）

（文学博士、早稲田・大正大教授）

はだしの国

インド

斎藤 昭 俊

暑い国のインドでは、多くの人ははだしである。勿論女の人でも、南インドは北インドと違って常夏の国だから、北ほど暑くならないし、また北ほど寒くならない。こういう所では裸足の方が気持ちいいかも知れない。大地から感ぜられる冷たさは心よいものだから。そんな点で北の裸足は南にくらべてずうっと少くなる。南で、マドラスは大会であるが、ここで歩いている人達の七〇パーセントは裸足である。大変いい恰好した女の人のはだしで歩いている風景は、全くマドラスの特色である。

そして、南の女は髪に花をさしている。こ

の花は勿論造花ではない。一つ二つ或は一杯

にかざっている。朝これをつけて、夕べにとるわけである。南の方は人種的にはドラヴィデアンで、色は黒い。こうした人達がはだしで外を歩いているが、その足で家の中も歩く。普通、田舎の家の土間は土である。北インドでは壁も土で、みな泥で出来ている。外でも内でも土を踏んでいることになる。従って、外と内とを区別する觀念が薄くなることもあるのだろう。汽車に乗っていると、インド人の殆んどの人が土足のまま座席の上にのぼる。インドのお寺では履物は全部ぬがせられるが、はだしだったら洗いもしなければ

拭きもせずに、それこそ堂々と入れる。家中だって土だから別に外と変りはない。足の裏がどんなに汚れていても、下をよごしもしない。都会の家は煉瓦造りやセメント造りになっているが、そういう家に住んでいる人達も、床の上をびしゃびしゃとはだしで歩いている。暑い国では、靴下や足袋のようなものは不必要なわけだ。北インドのガンガ流域が暑いときには四十五度にもなるのだが、こうなったら地面だって熱せられてしまうと思う。そんなところでは裸足は困難だ。誰れもお金が入ると一番最初に買うのは皮の革履だと云っていたが、北インドではあり得ることだ。長いことはだしでいるのだから、どんなところでもはだしで歩くし、たまに靴をはくと、本当に何処かへ忘れてしまう。カルカッタで喫茶店に入っていたら、女の子が戻って来たので何んだらうと思ったら、靴を忘れて取りに来たのだった。家でははかないのだが、外へ出たものだからはいて来たのだろうが、ついいつものくせが出て、靴を忘れて行ってしまったのだろう。

インド人は土に親しみ、土によって生きて

いる。多くの家が土で作られ、雨期の後は、

雨に洗われて土が崩れてしまうから、雨期になると大変だ。女達は落された土をまたこね直して塗っていく、インドの家というのは土の上にまた土を塗って厚くしてあるものだから、雨期あけには何処の家でも女達が土を塗っている風景が見られる。

インドには土地を耕やして生活する人達が約八〇パーセントはいる。勿論これらの人達が、ただ土地を耕やしているわけではない。

農村に生活しているという意味である。土地の耕やし方をもう少し進歩させたら、もっと土地で食べられるのだろうが、余り土地が広くてあり余っているので、いい加減に使っているという感じである。種をいい加減にまいて、それこそいい加減に刈り取ってといった具合である。勿論農事試験場はあって、研究はしているのだが、これだけの土地をもつて大部分が農民という国でありながら、大学出の農学士は一〇〇ルピーで、工学士は三〇〇ルピーという初任給の差がある。一ルピーが七十五円だから一〇〇ルピーは七千五百

円ということになる。

こんな状態で、農業の方はいいかげんにしておいて、目下、国をあげて工業化を図っている。インドの埋蔵鉱物資源は大したものがある。鉄鉱石にしろ、石炭にしろ、鉛にしろ、全くこれからどしどし発見されていく可能性が充分にあるのだから、工業化を図って、一応の体制を整えればしめたものである。西独あたりでもこの工業化を助けると云っている。

東南アジアの国々を廻ると、インドがやはり他に比べて工業国であり、そのリーダーシップをとっていることが分る。色々な文化関係でもそうである。インドだけを見ていると、仲々どうして工業化なんか図れるものか、インドは土の国で、農業だって原始的ぢやないかという具合になるのだが、パキスタンからやって来た日本人が、インドへ来たら文明国へ来たような気がする云っていた。中近東を廻って来た新聞記者が、インドはやっぱり文明国と思っていますねと云っていた。ネパールなどは全く経済的にインドに支

配されている。

ところが、インドは第一次五カ年計画が終って、第二次になって第二年目にもうお金がなくなってしまった。世界銀行からだけでも五億弗以上借款することになっている。これは電力開発、それに港湾施設拡充や、かんがい計画をしているとブラック世界銀行総裁は云っている。かんがい計画は大分力を入れて



ベナレスの王様の宮殿の一部で女子学生と一諸にいるインド人学生、左手は筆者

やっている。私の見た範囲では、パンジャブ地方が大分作られていた。ラージャスタンに行ったときも、役人達が「水のマジック」



写真説明 ペナレスの町を歩いているガンヂー帽をかぶった男、右手に午の後部が見えます。右手に見えるのはサイクル・リキシヤで、手前は少年です。

だと云ってかんがい用水のことを話してくれただ。この地方は半分以上が砂漠地帯であるが、ラージャスタン政府で用水を作ったところ、その附近に青々と植物が繁ったということである。

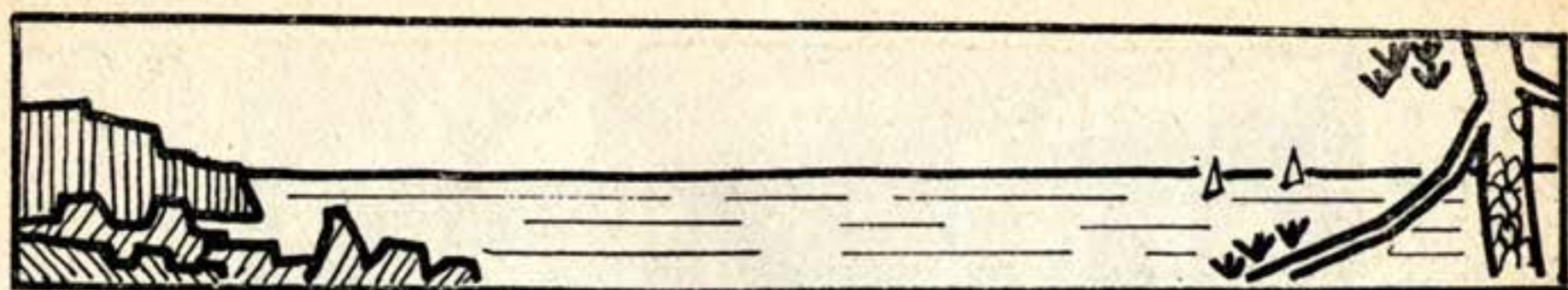
インドはあまり大きな土地をもっているから、一度にやるわけにはいかない。しかし、どんな形にしろ、こういうことが考えられ、そして実行されていることは事実だ。私はこういうやり方に対して、やることは結構だが、その運営にあたる人々が色々な面でいい加減だということを強調したい。

人間が土から離れてしまうとどうも素朴さがなくなってしまう。土地によって生活するものに、極めて素朴な、そして重厚性があるものである。なまじっか官吏になるとその純朴さを失ってしまう。こういう人達がはしにも棒にもかからないのは、どこの国でも同じようである。やはり土に根ざしている人達は個性の強さがある。それに伴って土臭さがあるのは仕方のないことだが、彼らは九世紀の頃に侵入して来たマホメット教徒によって支

配され、十八世紀以来は、英国に支配され、廿世紀即ち一九四七年に独立するまで、長い長い間、彼らの生命を持ちこたえて来た。その粘ばりと辛棒強さとはやはり大したものである。長いこと迫害にあいながらもなおつづいて来た九州のキリシタンを私は思い起したのであった。インドの大部分の者はインド教徒であつて、回教徒に支配されたからといっても回教徒にもならず、イギリスに支配されたからと云つてもキリスト教徒にはならなかったこれらの人達は、素朴な中に、しんの強さを持っていることがわかる。

私はインド人の誇り高き姿に接し、土に根ざして強固さに接して、強い感動を持ったものである。大抵の日本人はインドを日本の社会とひき比べて云うから、ガッカリして、駄目だとか何とか云う。しかし、長い歴史の中にヒンドユーの思想が連綿としてつづいていたことは全く驚異すべきことなのではないだろうか、インドの弱さは結局は強いものだったのである。

(筆者はインド政府招へい留学生でべ)
(ナレス大学に二年学び最近帰朝した)



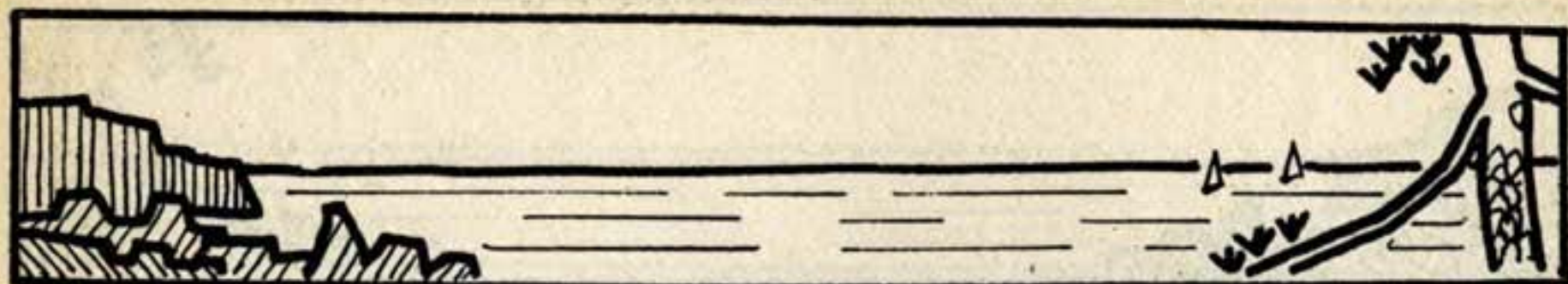
獄中で両親を探し求める

林 靈 法

近ごろはしきりに両親のことが思われる。自分が子供をもって、始めて親の有り難さがしみじみとわかってくる。子供が幼稚園から小学校、中学校と成長するにつれて、親の苦勞というものは益々深くなってゆく。思い切って、たった一人の娘を東京の大学に入れはしたものの、この三年間の親の氣持というものは、自分ながら面白いほど弱々しい場合もあった。何千名かの生徒の校長となること、或は教育者として人の前に立つことは案外容易なことであるだろう。しかし、一人の子の親となることは、まことむづかしいことである。

子供が心配ごとを訴えに來たり、私の助言をうけていそいそと東京へ帰ってゆく後姿を見送りなが

ら、私はいつも亡くなった両親の氣持をおしはかっていた。特に私の場合は普通の世間でいう親子の死別ではなかったから、それだけ自分の氣持にも深いものがあるのかも知れない。私は昭和十二年の暮に当時の治安維持法違反のかどで、軍部のために拘束をうけ、約二年間、東京の留置場、巣鴨の拘置所に入れられ、判事のとり調べが終って一時名古屋の故山に帰ることができた。しかし、すでにそのときは両親はこの世にはいなくなっていた。一握の白骨となられたお骨箱を二つ抱きしめて、本堂の片隅で涙と共に悔恨と憤激の情にいく夜泣いていた。わが子の性格、氣性、心持など、すべてを最もよく知りつくしていられたのは両親であった。許されて帰り



ゆくその日まで、何としても両親の健在であることを願っていた私だった。「願うべきことではないが、千載一遇のこのよき機会に、お前の信仰をたゞき直して来いよ。帰りくるその日には、お前のうしろに御光をいたゞいて来いよ。」留置場に苦しむ私に送られた父親の最後の手紙には、こう書かれていた。

× × ×

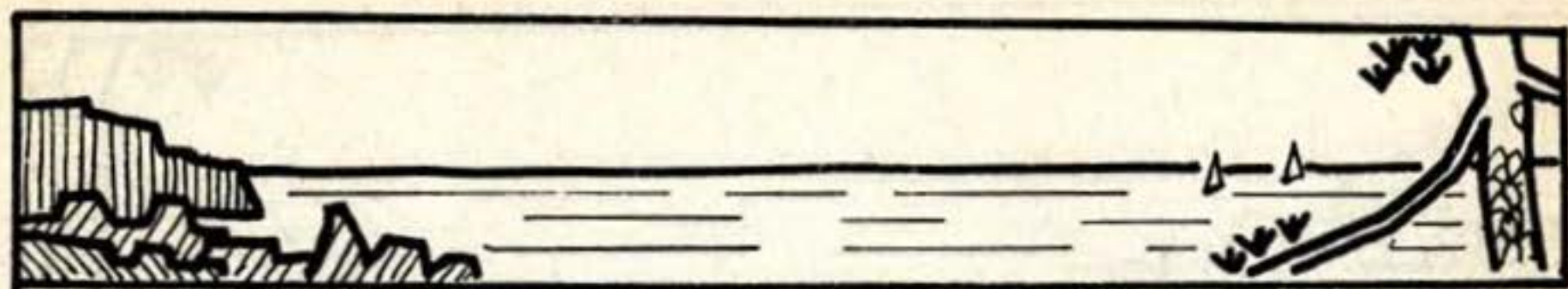
両親は、私が昭和十二年の暮から十三年にかけて戸塚警察署に留置されているときに亡くなった。父親は二月の十七日、母親は二カ月おいて五月の二十日に亡くなった。両親の葬式には、私服の刑事が二人つき添ってお焼香だけ許されて、たゞちに東京の留置場に帰って行った。

しかし、この両親の葬式を通して一番淋しく思ったのは、母親のお骨拾いするときであった。火葬場で私の前に引き出された台の上に、確かに昨日はこの台の上に母親の体をのせてお送りしたのだが、いま目の前に示されたのは、僅か一握りのお骨となった母親のからだであった。思わず吾手の上に一握りのお骨をのせて、じっと見つめていると、ただもう玉

のような涙が落ちるばかりである。お骨をそれがぬらしているのだった。私が生まれたばかりの赤ん坊のときには、母親はその手の平に私をのせて産湯をかけて洗って下さった。六十一年の生涯の今日、私の手の平の上にお母さまは、一握りの白骨となつてのつていなさるのだ。このときは本当に人生の淋しさというものをひしひしと感じていた。

それから尚、長い間、留置場の中で暮したのだが、私は毎日亡くなった両親を探し求めていたのだった。

死んでしまった両親を今更探し求めたところで見るものでもなく、又帰って来られるものでもない。又いかに心配をかけ不孝をなしたかというその悔恨の情を深めたところで、今更どうにもなるものでもない。しかし、両親は決して亡くなっているとは、どうしても思うことは出来ないのである。どこかに生きていられるような気がしてならないのである。日本の学徒諸君が、かつて遙かなる山や川にその最後の息を引きとっていったとき、だれもが母親の顔を思いおこし、又母親を呼びながら死んでいったその気持は自分にもよくわかるようである。そこ



で、私は毎日留置場の中で、浄土三部經の經典を読みなおしていた。もちろん留置場の中へは書物など一切持って入れない。そこで浄土宗聖典の中にあるところの三部經の部分だけを引きちぎって、それを懷の中へ隠し持っていた。毎日地下の薄暗いところで、見廻りの担当に知られないようにして味わっていた。特に無量壽經の四十八願については、毎日その一カ条を繰り返し繰り返し味わっていた。

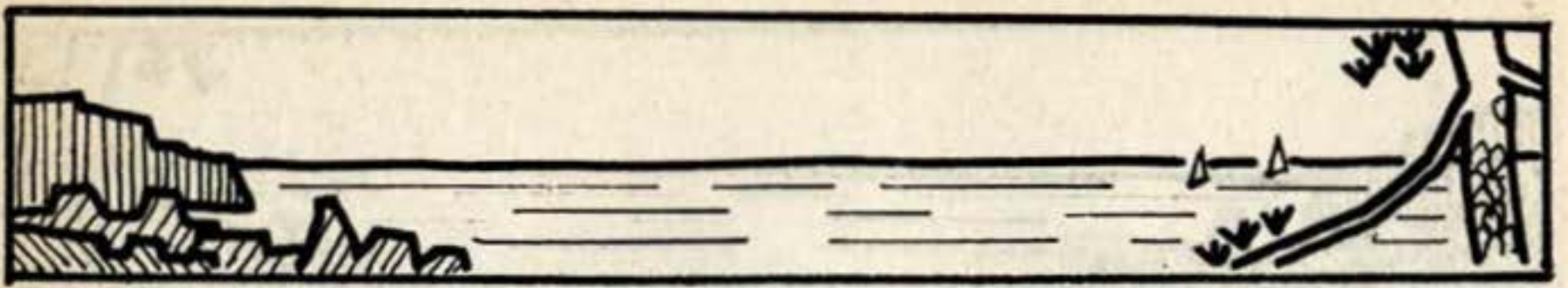
そうしているうちに、いわば私の信仰の目が多少とも開けて来たのだろう。従来は哲学や宗教についても多少研究をして来た私ではあったが、それは単なる学問であり理屈であって、生きた信仰の事実を味わうというものではなかった。それがこうした事件によって、こうした環境におかれて、今や自分の学んで来た学問や哲学というものをもう一度見直し、その上に本当に生きた人生信仰に進もうとしていたのだった。いわば、私はいやおうなしに新しい人生の転期に立たされていたのである。私は朝六時の起床から、夜の八時就寝のときまで經典の一字一句を求めて、そのどの中に両親は生きているのか、見出し得られるのかと真剣にさがし求めていたの

である。

× × ×

ところで、いよいよ起訴されて巣鴨の拘置所に送られることとなった。今度は、独房の淋しい部屋では、書物を毎日読むことが許された。拘置所の図書館から借りてもよし、外部からの差し入れもよし、いづれにしても手もとに五冊の書物を置くことを許された。私は今度こそ、あらゆる書物を読んで、どこかに両親の生きておられる姿を見出そうとして、さぐり求めていったのである。望月先生の編輯になる「法然上人全集」を隅から隅まで読んでいった。三部經の經典もちろん繰り返し繰り返し読んでいた。これについての浄土宗や真宗の学匠方の講説書も殆んど目を通していった。

ところが、ある日法然上人が南都の東大寺で三部經の講説をされたその草稿である三部經釈を読んでいたときである。もちろんこのところをこれまで何度かすでに目を通していた。ところが、その阿彌陀經釈の中で、法然上人が「若し生々世々の父母、師長、妻子、眷族、朋友、知識などに相見せんと欲せば、まさに発願して極楽に往生すべし。」と書か



れてある文字がふと私の心をとらえたのである。何心なくふと心をとめて見たとたん、何か心に閃めくものがあつた。私はくい入るようにして、長いことこの文字をじっと見つめていたのである。それは相当長い時間であつた。そうだ、両親は生きているのだ。たしかに生きているのだ。死んだのではない。私の心の底に何か大きくうなづくものがあつた。すると両親の声が大きく聞こえて来た。「願うべきことではないが、千載一遇のこのよき機会に、お前の信仰をたたき直して帰って来いよ。帰り来るその日にはお前のうしろに御光をいただいて来いよ。」この私のからだを包むように、何か温かいものが私の周囲に訪れていたのである。

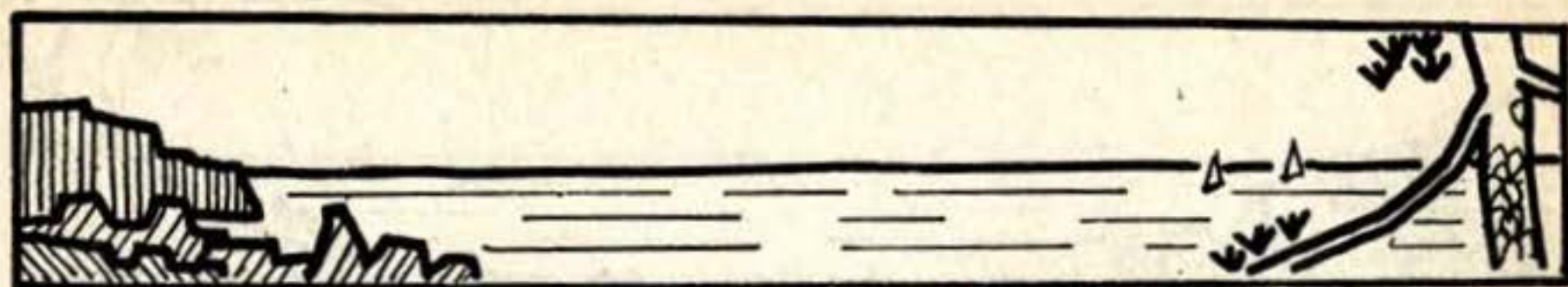
これまで、私はこの法然上人のお言葉をいく度も読んでいた。しかし、それは素通りであつたのだ、いまこそ、この文字が本当に私の心に生きて来たのである。心に読めたのである。ついに私は両親の居所を知ることができたのである。このときの私の喜びは非常なものであつた。

× × ×

浄土教の大事な信仰に俱会一処という言葉があ

る。源信の往生要集には浄土十楽の一つとして聖衆俱会と述べられている。浄土において、そうした親しき人々に会うことのできる喜びを言うのである。更に、この喜びを父子相迎という言葉をもっても呼ばれている。

この世において、父母と慕い求め、夫、妻と愛し信じ、しかもこうした親しき人々と別れてゆかねばならぬことは、実に悲しみのきわみである。しかし、これとても人間の宿命として受けとってゆかねばならぬ。先に逝った父母、或はひとり子の行方を尋ねて、人々は死ぬほどに悲しみ嘆くのである。しかし、そのとき、私はこういうふうに言うであろう。もし先に逝ったいたいという人々の行方をば探し求めようとするならば、先ずあなた自身が心の目を開いて信仰の世界に入ることである。あなた自身の信仰の目が開けてくれば、必ず、先に逝った愛する人、恋しい求める人が、現在どこに生きつづけているかが、はっきりとわかって来るということである。実に、仏教の信仰は死ぬるためのものではない。本当にどこまでも生きつづけてゆくためのものである。法然上人は先に逝った両親やわが子に会い



たぐは浄土に往生してみよ、必ず会えるのだと言い切っていられる。俱に一处で会うことの喜び、即ち俱会一处の喜びは、浄土教信仰の不滅の楽しみであるといえる。

しかも私はこう言うのである。すでに天地宇宙の真実の命の世界である浄土に逝き給うた両親は、単に浄土という所に安閑としていられるのではない。浄土とは何かこの現実と隔絶された世界、概念的に固定された世界を言うのではない。浄土とは浄土化してゆく活動の世界を言うのである。この現実の中にあらわれてこれを別々に浄化しゆく真実生命の力を言うのである。実際、日ごと夜ごとこの地上に苦闘をつづけてゆく私の身を、両親は十重二十重に守りつづけていて下さる。両親の本当の命というものは一瞬一刻、何億辺となく私の身の廻りに還来し給うて、人生の導き手として指導し給うているのである。私は両親健在なりし日より、亡き今日、始めて両親の本当の命が、益々不滅の光を私の身に示し給うていることをしみじみと感じているのである。そして、このことは、これから年と共に、益々深く感ぜしめられてゆくであろう。(東海高等学校長)

(童)(心)(仏)(心)

「お」の字の

つくもの

春雄君が、友子ちゃんの家遊びに行きました。
「ちょうど、お三時のおやつよ。ママー。おケーちちょうだい。」

友子ちゃんが、大きな声でいいました。

「はいはい。でも、きょうはおようかなのよ。おなががすいているなら、おパンに おバタをつけて、おコーヒーをおあげましょうか。」

春雄君は、ゴクンとのを鳴らしました。

(おようかんで、どんなに素晴らしい物だろう。)

けれども、友子ちゃんのおかあさんが持って来たのは、ふつうのようかん。春雄君の家でたべると、すこしもかわりありません。

帰り道で、春雄君は考えました。

「お」の字のつくもの何がある……お大根、おサイダー、おトイレ、おジャガ、お手ぬぐい、お靴、お着物、おみかん、おたばこ……おかあさん、おじいちゃん……。ずいぶんたくさんあるな。「お」の字って、かわいそうだな。だって、あんまり使われすぎるんだもの。」(淵)

実話

暴力の船

吉野翠幹

え・かとうきんいち



「第〇班集まれ」という声に、私も遅ればせ

ながら幕舎の前に来てみると、すでに四十名位の者が円く集っていた。それらに向い合つて、一人の兵士が台の上で、何やら巻紙に書いたものを懸命に朗読していた。ついぞ見掛けたことのない、もちろん名前も知らない男だが、オロオロしたような声が、かすれてよく聞きとれなかった。しかし朗読の中で、

「同志諸君」とか「祖国ソ連のために働きたい」とかいう文句があったので、私にもやっ

と察しがついた。この男は恐らく靴工が縫工かの特技の持ち主で、そのため、今同僚と別れ、華々しく？独り奥地に引き戻されるところらしい。

幾年もの間、一日とて忘れ得ない、夢にまで見続けてきた、このナホトカに、やっと辿着いた私たちであった。理由は判然としないが、何故この男だけが私たちと別れなければならぬのか。帰国を目前にしながら、「選ばれて、更に祖国ソ連に尽せることに感激している」と巻紙まで朗読しなくてはならないのか。無惨であった。私はとつてもこの小柄な兵士を見るにしのびず、それとなくわきを

眺めて立っていた。

その兵士が台から降りた。集っていた班の者も散って行った。私もヤレヤレと踵を返すと、一人のオルグが私に寄ってきて、大勢でがなり始めた。

「待ち給え。いまの君の態度は何ごとだ。君の耳には同志の感激の言葉が入らないのか」

「………」

「………」

「君は元将校である。軍隊時代に横暴を極め、その上無力であった同志多数をいぢめてきたのだらう」

「………」

私は黙って立っているより外はなかった。私は周囲に無数の視線を感じながら、沈黙、沈黙と心の中でつぶやくのが精一杯だった。オルグはいうだけいって、立ち去った。私はその夜は一睡もできなかった。いつ呼び出しがかかって、昼間の男と同じ巻紙を朗読させられるかが判らないからであった。

もともと私がナホトカにいて、数千数万の人々と一諸に帰国の順序を待っていること自体が不思議であった。

× × ×

昭和二十三年の夏、現地では帰国の希望が現実さを帯びて互に談られ、漸く活気を取り戻していた。何回目かの送還者名簿が発表されて、その中に私の名のあった時には、自他共に驚いた。これには多くの理由と複雑な経緯があったが、それは別として、待ちに待った現地出発の日となった。

その日、帰還者一同は用意を終えて、午前三時に指定の広場に集った。間もなくソ連下士官がきて、一人一人の名を呼んで、面接の場所に導いた。従って広場からは呼ばれた者の姿が消えてゆくので、さしもの大勢も午後三時頃には広場に誰もいなくなってしまうた。残されたのは私一人であるから、今度呼び出しがあれば、間違いない私である。「へそ曲り奴、俺を最後にしゃがった」と苦笑している内はよかったが、いくら待っても呼び出しがなかった。四時になり、五時になった。帰還命令の出なかった残留組が、もう作

業から帰ってくる時分となった。さすがの私も諦めて、昨日まで住んでいた幕舎に帰ってゴロリ横になった。ところが幸い夜六時頃になって、私だけ呼び出され面接を終わった。

その夜は露営で、翌日は朝から行進を開始し、夕刻に列車に乗ることができた。

列車に乗ってから、毎日必ず二、三時間停車することがあった。そんな時全員下車を命ぜられ、労働歌の合唱とアチ演説を聞かされた。列車の進行中は、アクチブの車に呼びつけられて、膝詰談判で共産主義への勧誘である。

私は遂に最後の切札を出してしまった。

「君たちの主張はよく判ったからもう質問しないで欲しい。若しこれ以上私が説明するなら、ソ連の現状にふれなければならぬ。私がソ連を批判したら、直ちに下車させられることは御承知の通りだ。君たちが私を帰国させない決心なら止むを得ないが、そうでなかったら、これ以上の議論は船の上でしようぢやないか。」

列車が進むにつれて、私の苦勞は更に深刻になった。それはその内に一斎検査があっ

て、一部は下車させられるという噂であった。その内にハバロフスクでは厳重な検査があると、誰いうとなく皆がこう信じた。

列車がハバロフスクに着いたのは、夜が更けていた。月光が白く曠野を照し、街中は静っていた。私は一斎検査があったにしても明朝のことだと考えながら、しかもなお住みなれた貨車の片隅に座ったまま、耳をすませていた。フト私は同じような三年前の夜のことを思い出した。やはり月の明るい夜だった。突如、三人のソ連兵が貨車の入口に現われて、一人が自動短銃を私の胸もとに突きつけ、他の二人が貨車の中に入って略奪した。私は長靴までとられてしまい、逃げてゆくソ連兵の足音に耳をすませていた。その時も同じく空虚な一時であった。

夜明けに間のない頃になって、急に列車が動き始めた。私は線路の入れかえと思っていたと、何んと列車はそのまま走り続けてしまった。

× × ×

二十五日間の列車の旅を終って、ナホトカに着いた。ナホトカではのん気であった。時

折は労働歌を練習し、演説を聞く外は、海を眺めて日を暮した。演説の内容は何度聞いても大同小異であった。敗戦のおかげで民衆が解放されたこと、ソ連の偉大な軍備を讃えること、スターリンに感謝すること、日本の現情が革命前夜であること、日本政府の無誠意

は船のこないことで証明されること、そして日本への敵前上陸を目前にして同志諸君よ斗志を旺んにせよと結ぶのであった。しかし幹部は少ないし待期している者は無数なので、手が廻らない。

私は幕舎にいたくないので、どんな使役にも進んで応じた。使役の多く

は食糧、燃料の運搬程度で楽であった。一度便

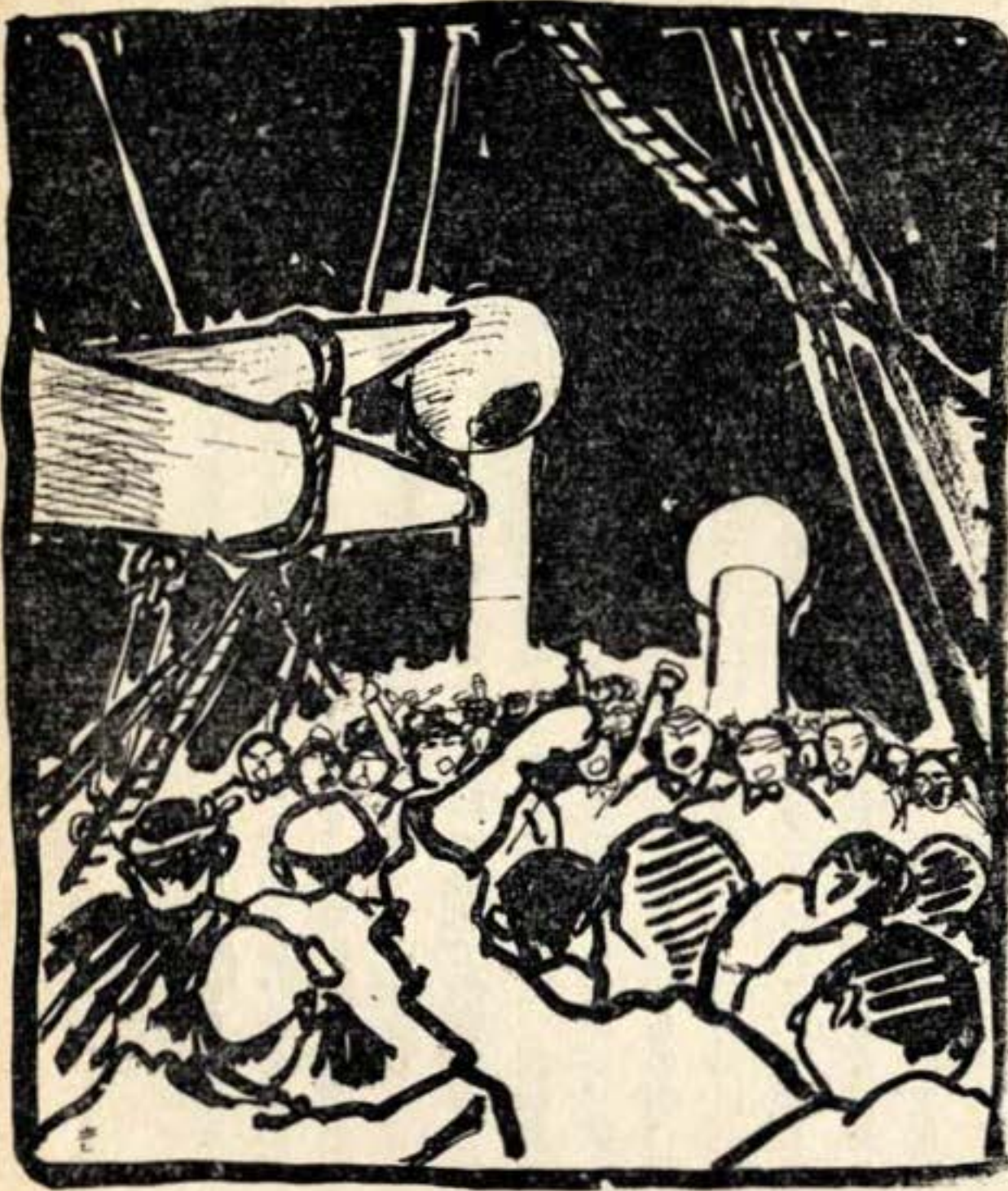
所の汲み取りに行った時は驚いた。便所はもちろん露天で、幾千の者の糞尿が一つ穴に流れ込む式のものであった。その穴は、横が二十米に縦が八米位ある。この大穴にこんもり盛り上った

糞尿は、乾季で雨がなから固くなっている。汲み取りといっても糞尿の上に立って、スコップで桶にとり、これを自動車で運ぶ。五人位で一日中かかって大して減りもしない。夕刻に作業が終ると池に入って身体を洗う。洗うというより池の中で泳ぐのである。幾日ぶりがで公認の水泳をやり、身体を洗ったのは愉快であった。

× × ×

やがて私たち一団の帰国する順序が廻ってきた。私たちは隊伍を整えて式場の広場に集った。まず挺団の編成が行われ、挺団長には軍医少佐が、副挺団長三名にはアクチブとして活躍していた中尉がそれぞれ任命された。中隊長以下はそれぞれの先任将校がなり、私の分隊には幸い先任大尉がいたので、私は列兵に止まることができた。この編成は、昨日にかわる軍隊式編成であった。私は一年以上も前に、共産主義者以外は指揮をとらせないと宣言によって、中隊長を辞め一兵卒として労働に従事していたわけである。

続いていろいろの行事があった。私のいる所からは遠いので、壇上にソ連将校が登った



り降りたりしているのが望見されただけであった。最後にスターリンに対する感謝決議文の可決、スターリン万才の三唱があった。この万才で手を挙げなかった私の存在などは誰の眼中にもない程、幾千の者の気持はすでに船上にあった。

船が出航して、陸地が視界から消える時分には、陽が波の下に沈んで行った。私は第一船倉の一番下でぼんやり考えていた。目にしみるように仰ぎみた日章旗、きびきび働く高級船員の姿、それにも増して懐しい沢庵の味、私にはすべてが夢のようであった。私は気疲れして、睡ろうかと思っていると、甲板から「A上等兵あがってこい」と呼ぶ者があって、Aが階段を上って行った。間もなく同じ声で「B上等兵あがってこい」と呼ぶと、Bが階段を上って行った。

どうやら甲板上はただ事でないらしい。私は気になって甲板にのぼって見たら、暗い中で確かに喧嘩をしているのが判った。私は呆れてその方に近ずこうとすると、誰かが私を引きとめて側の方に連れて行き、こういった。

「隊長、今夜は面白いものをお目にかけますよ。あぶないから下に降りて黙っていて下さい。」

どうやら甲板の到る所で、幾組もが乱斗しているらしい。その男の話によれば、敵は無数で、こちらは少数だから、各個撃破で一人ずつ殴っているらしい。

私は暗闇で怪我でもしたらつまらないので船倉にもどった。反動兵士が何人乗り込んでいるのか知らないが、多くても一％位であろう。一年も二年もの間、同僚は売られ、自分は密告され、明らかに不利な労働を強いられ食事まで区別されて暮してきた。絶対であった帰国の希望すら半ば諦めさせられながら、尚も反動で貫いてきた者が反動兵士である。海の上に出て、対等の地位を得た彼等が、暴力によって憎しみを達そうというわけであった。

甲板の騒動は朝まで続いた。昨日まで隊のリーダーとして活躍していた若い兵士たちは一晩の内に大体殴られてしまった。朝になって周囲を見渡すと、あちこちに変形した顔をかかえて呻吟している者が目についた。

扉の御法語

勅修御伝第二十一巻は「上人つねに仰られける御詞」を列記したものであります。上人がお弟子とお話をされて、常日頃に幾回となく繰り返し述べられていたお詞ということでしょうが、また逆に弟子たちの耳には、よく聞きなれた、慈愛に満ちた上人の数々のお詞ということでもありましょう。扉の御法語も、この巻に出ているもので、この御法語だけでも察せられますが、どのお詞を拝見しても日常の会話そのまま、実に易しくしかも念仏の真ずいを示されています。従って私たちにも、このお詞ならばできるといふ心持を起させ、いい知れぬ親しさを憶えさせるお詞であります。

三心とは、申すまでもなく、至誠心、深心、廻向発願心の三つのことです。私たちは三心に副うように努力することが先きであり、この努力によって名号が唱えられるように存じていましたが、扉の御法語を拝見すると、アミダ仏と心に念じ、口に名号を唱えれば、それで三心が具足すると教えられています。お念仏を何か特別のもののように思っているはいけないうというお叱りに、私は上人の慈愛の深

昼間は主として「つるしあげ」をやっているらしい。副挺団長を初め、主だった将校が相手らしい。私のところまで時々罵声と洪笑が聞えてきた。彼等も船上で逆に「つるしあげ」をされるとは思わなかったろう。彼等の手のものの「つるしあげ」が、こんなに卑劣であり、集団暴力を発揮するものかをあらためて体験していることであろう。

やがて二日目の夜がきた。初め船尾に起った暴力の嵐が段々船全部に拡ってきた。しかも上甲板ばかりでなく、今夜は下の甲板まで移ってきたらしい。船は恐るべき暴動のうちに二度目の夜が明けた。夜明けを待って非常呼集がかかり、点呼がとられた。その結果、幾人かが足りないことが判った。

点呼にいなかった者は、それなら海の中か、まさかと思った心配は、やはり杞憂であった。船長は帰還者を無事日本に届ける責任がある。船長は船員を督励して殴られた者を船室に「保護」をしたのであった。中でも副挺団長のS中尉は、殴られ胸あげされて、まさに海に投げ込まれるところであった。運よく船員数名が、これを発見し、必死で止めて彼は助かった。S中尉は忠実にソ連のために働いた男で、性格の上でも欠点があった。

中隊長会議が終ったとかで、私たちの中隊長K大尉があわてて帰ってきた。皆を集めて暴力を止めてくれと懇請するのであった。

K大尉は特に私を呼んで、中隊長会議の決定であり挺団長の命令であると前置きし、副挺団長S中尉を罷免して、私を副挺団長にするということであった。私はそんな馬鹿な話はない、中隊長を辞めてから今日まで、何んのために列兵できたのか、今さら喧嘩の仲裁のために副挺団長ができるものでない。私は固く断った。中隊長会議で私の名を出し、この更迭以外に方法のないことを主張したのは実はK大尉であつたらしい。私もK大尉とは長らく苦勞を共にしてきた仲なので、しぶしぶ彼の言に従うことにした。

余りにも無策な話に腹をたてたが、とにかく挺団本部に行つて、S中尉に逢うことにした。船倉を出て、本部に行くまで階段を登ったり降りたりしてゆく間に、私は一日二夜の暴動が如何に深刻であつたかをまざまざ知ることができた。私はS大尉の曲ってしまった顔をみるなり、「とんだ目にあつたね」と慰めないわけにはゆかなかった。すると彼は何を感違ひしたのか、私の前に両手をついて、「私が悪かった。私の指導が間違つていた。」と謝った。私はこの惨めな姿を眺めて、言葉もなく嫌な気がした。

さを感じるものであります。

上人のお詞は実に平易であります。それだけに、これを拝見する者にとつては、自分の素質、環境によつては、受取り方にいろいろの段階ができてきます。上人のお詞が平易だからといって、これに慣れ、安易に落ちてはいけません。已惚れてはいけません。

同じ第二十一巻の終りの方に、上人の御注意が出ています。つまりお念仏を信じているからと申して諸仏のお教えを軽んじたり、悪くいうような事が、ゆめゆめあつてはいけないとあります。そして「阿弥陀仏を信じたればとて、よろづの仏をそしり、もろもろの聖教を疑ひそしりたらんずるは、信心のひがみたるにてあるべきなり。心信ただしからずば、阿弥陀仏の御心に叶まじければ、念仏すとも弥陀の悲願にもれん事は一定なり」とお叱りになつています。これこそ空念仏と申すのでしょうか、強く「悲願にもれん事は一定なり」と断固たるお詞で申されていきます。罪を犯してもお念仏すればよいという者があつたなら大事です。もしそのような者があつたら、それは「ものもしらぬ男女の輩をすかしほらかし、罪業をすすめ、煩惱をおこさしむる事、天魔のたぐひなり、外道のしわざなり。往生極樂のあだかきなりと思へし」と極言されています。

こころの茶碗

—— 信仰のありかた・その二 ——

竹 中 信 常



一

先月号にも申しましたように、現代人は心のよりどころを、色々なものに求めております。機械の正確さ、宣伝や広告の文句、政党のかかげる公約、そういったもの

に、せめてものよりどころを求めているのであります。ところが、実際には、そういったものすべてを引きくるめて、凡ゆるもの、宇宙全体が大きくめぐり、動いているのであります。ですから、結局、これ等のものも絶対的な信仰の対象とすることは出来ません。いわば、相手があつての、相手次第でどうにでも変わるもの、そういったものは信仰することは出来ません。時代が移ろうとも、環境が変わろうとも、どんな人々にでも信ずることの出来るもの、そういったものこそ、本当の信仰の対象なのであります。

二

さらにもう一步深く考えてみますと、信ずるということとは「誰が信ずるのか」ということになります。そうすると、それは、「自分が」信ずるというほかはありません。

人にお金を貸すにしても、相手を信用してのことですが、これは他人にいわれても駄目で、最後には、結局、自分が相手を信用してのことです。国家と国家の話し合いにしても、自分の国が相手の国を信じてから、始めて相談や条約がまとまるのではないのでしょうか。こうして、信ずると

いうことの裏には「自分」というものがあるわけですが、ところがこの「自分」という奴が、大変なしろものなのです。自分で自分がつかめない。自分で自分が自由にならない。そういったものなのです。ですから、昔からの格言に「克己」ということがありますくらい、「おのれに克つ」ということは、非常にむづかしいものです。ギリシャの哲学者プラトーンも「克己は勝利の最大なるものなり」といっております。仏教では早くから、己れを制御することの大切なことを教えております。長老偈経の中の有名な一句を引用してみますならば、

あたかも、駿馬を御するにすぐれたる御者が

生れ良き馬を調御するが如く、

わたしは

五つの力（信・精進・念・定・慧）をも

って、

心よ、

汝を調御するであらう。

とあります。このように、自分でも仕末におえぬような「自分」というものが「信ずる心」の裏に、ベツたりとへばりついていてのですから、話は少しややこしくなっております。

確かだ。安心出来る。そう思って「信ずる」のですが、そう思うものは、ほかならぬ「自分」なのであります。その「自分」が、只今申しましたように甚だ厄介な存在でして、ぬらりくらりとしてつかみどころもなく、また、猫の目のように常に変化しているのです。「今泣いたカラスがもう笑った」といいますように、泣いたかと思うと笑い、笑ったかと思うと怒る。こんなふうに、信ずる側の方が猫の目のように変っていたのでは、たとえ相手の方が確かでも、それで安心するわけには行きません。

三

こう考えて参りますと、信仰ということ

こちらの心がクルクル変っていたのでは「信ずる」ことにはなりません。どうしても、まづ自分の心をおちつけて、出来る限り変らぬようにすることが大切のようです。ですから、信仰ということをいいかえてみますと、「心のポーズを変えないこと」とも申せます。世間では、よく「初一念」ということを申します。一番始めに「こう」と思ったこと、これを最後まで押し通すことであります。あとになってふりかえってみますと、それで案外成功する場合が多いようではありますが、それは「初一念」を押しておす。グラグラしないで、そのままの心のポーズで行くからかも知れません。節をまげないとも申すのでしよう。

いづれにしましても、こうして「信仰」ということは、まづ第一に自分というものをはっきり見きわめて、これをしっかりと押えつけてかかることが大切であります。そして、信仰ということはこのような見方でみて参りますと、そこに自然と二つのこ

とがらが、出て参ります。その一つは、信ずる相手が自分と同じ人間であつたり、思想であつたり、主義であつたりする場合、その信仰は絶対的なものとはいえません。何故なら、こうしたものは、時代と場所と人によつて色々に異なるからであります。

これに對しまして、時間にも空間にも人間にも限定されないで、いつ、どこでも、誰にでも信じられるもの、いわば精神的なもの、または法則とか原理とかといったもの、こういったものを相手にする場合、それは或る意味で「絶対的」信仰ということが出来ます。しかし、一たす一は二ということ、これはいつどこで誰にとつても真実であります、それならこれは信仰であるかと申しますと、これは「信仰」とは申せません。信仰というのは「事実の實在」——自分が未だみないものを「まことのこと」であるとするこゝで、本當にある——實在する——と信ずることなのです。私共は普段ものごとを知るには、見たり、聞いたり、考えたりして知るのであります。一た

す一は二ということもそのようにして知られたことで、これは單なる「知識」であります。これにたよつたり、安心したりする観的に、それが真実であり、心のよりどころになるものだと知ることなのであります。理屈でわ

り切つて知るのはちがうのです。ですから、これは形のあるものとか、目に見えるものとかを相手にするのではありません。また「理論・原理」でもないのです。いや応なしに、そう信ぜざるを得な



くなるのであります。心がその方にむいて
いる。先月号で申しましたように、心のボ
ーズがその方にむかって開放されている。
そういった時に心の中にとび込んで来るも
のなのです。それですから、心がそちらに
むいてない場合には、決して信仰というも
のは起っては参りません。「馬耳東風」で
あります。「蛙の顔に水」であります。明
治時代の高僧の一人に七里恒順という方が
ありました。この方の言葉に、伏せた茶椀
には湯をつぐことは出来ない。どんなにあ
りがたいお説教でも、心の茶椀を伏せてい
たのでは駄目だといった意味のものがあり
ます。

四

これに對しまして、もし心がその方にむ
いているならば、何の文句もなしに、スッ
ポリと心の中に入って来て、心一杯にみち
あふれます。満ち足りて心は安定します、
「鰯の頭も信心から」と申しますが、心が
その方にむいている人にとっては、鰯の頭

から後光がさしてありがたくなるのであり
ます。ところが、そうでない人がこれをわ
きからみていると、鰯の頭はやっぱり鰯の
頭としか思えないのであります。

アメリカのすぐれた心理学者ウイリアー
ム・ジェームズは、このことを「……につ
いての知識」と「直接の知識」と二つに分
けて説明しております。私共は「……につ
いての知識」は沢山持っております。世に
インテリと呼ばれ、知識人と称される人々
はあり余るほどにこれを持っております。
しかし、このような知識はいくら沢山集め
ても、心のよりどころにも安心のもとにも
なりません。青白きインテリなんといわれ
ますように、ものごとを沢山知る程、かえ
って、にえ切らない判断力のとぼしい人が
らになってしまふようです。それは「……
についての知識」、いわばものの表面だけ
を、外がわからみているからであります。
ふところ手をして、頭の中でだけあても
ない。こうでもないと考えているからであ
ります。相手の中にとび込んで、自分の手

で、自分の肌で、ちかになぜたりさすった
りして、これを感じとろうとする、その時
始めて相手を知りつくす。これがジェーム
ズのいう「直接の知識」なのでもあります。
砂糖の甘さはいくら説明されてもわかりま
せん。自分でなめてみて始めてわかるので
す。先頃、終戦の直後、まだお菓子など何
もない頃のこと。当時まだ小学校へあがつ
ていなかった私の子が、「お父さん、チョコ
レートってどんなもの」とききました。
私は「チョコレートというのはね、茶色い
板みたいな形をしていて、たべると甘く
て、ホロ苦がくて、舌の上でトロリととけ
て、とてもよい香りのするおいしいお菓子
のことさ」と、色々に説明してやったもの
です。ところが、いくら説明しても「ふー
ん」といったきり、不思議そうな顔をする
だけでした。それからしばらくして、よそ
からチョコレートを頂いたので、早速たべ
させてみましたところが、「お父さん、チ
ョコレートってとてもおいしいね」と、は
じめて分ったような顔を致しました。――

そうなのです。私共は「……についての知識」

「知識」は本からでも、新聞からでも、ラジオからでも、何かしらからいくらでも知ることが出来るのです。しかし、「直接の知識」、これはそう簡単には得られない。自分の力で、自分が努力して、始めて「体験」して得るものなのだからであります。

信仰の場合もそうなのです。ですから、他人の信仰をみて「鰯の頭も信心からだ」などといっておりますが、それならば、そういう自分はどうかといいますと、心のよりどころを持たない、ひたむきの心にもならない、たよりない人間にしかすぎないことになります。

五

こうして、現代人は余りに色々のことを知りすぎているために、一つのこと打ちこんで、これに向って自分の心を全面的に開放して行こうとする態度が少なくなってきたのです。兼好法師の「つれづれ草」（第百八十八段）の中に、こんな話が出ており

ます。

ある人が坊さんになろうと思った。そこでまづ、坊さんになると、檀家の家から馬を持って迎えに来られることが多いから、馬を習わなくてはなるまい。こう考えて、馬を習い始めた。しばらくするとまた考えた。法事のあとにはよくお酒が出て、宴会になるが、そんな時には歌を唱わされるだろう。何も歌えないでは困るから、歌を習おう。こうして、馬と歌とを習っているうちに、この方が面白くなって、いつまでもやっているうちに年をとってしまった、とうとう坊さんになることが出来なかった。

「……についての知識」のみを求めている私共現代人は、この人のことを笑うことが出来ないのではないでしよか。

（筆者・大正大学教授）

× × ×

喬木は、

いくら高く伸びても

天までは届かない

人間は

究め得べきものを究め

究め得ないものは

朗らかに

尊敬すべきである。

——ゲーテ——

浄土歌壇

岩野嘉久代 選



天

中里 史子

菊の家清く住まんと朝ごとに花に
まみへて心洗ひぬ

庭中いつばいに咲いてゐる菊の
花。「菊の家」という第一句が
それを現わしてゐる。朝戸を開
けると清い香が流れ入り、美し
い花が心を楽しませる。この花
に心を洗はれて、よいことの
み 考えて生きようと決心する。

地

串岡 君江

わが老後汝れにたのむと云ひし姑
陽のあたる部屋にひそと編みます
お互に信頼しあい、力になりあ
う仲のよい姑と嫁のむつまじい
風景、見てたのしい。

人

小野 徳司

豊の秋ひとみつぶらに黒白のぶち
の子猫をもらひませぬか

ユーモアの溢れた明るいお作、
猫ざらいとて、この歌には笑い
出さずに居られまい

二宮 綾子

中々に現はれぬなりさばかりの位
をもちて今朝の富士あり

杉原 素月

洪水に伊豆のおん寺流れ去り木魚
は浮かぶ泥海の涯

神徳 凱一

いとどらが住みがたきまで霜柱立
ちし大地の寂し立山

長崎 恒子

風紋のうつくしと聞く亡き父母の
故郷の沙丘踏む日のありや

渡辺 絲子

手先きにて鰯をつめて日の暮れぬ
恵曇港の籠詰工場

平川 ウメ

何となくアクセサリイの心地して
かくして持ちぬ水晶の数珠

牧尾有希子

親不幸な髪を見よなどいふ声す見
れば代緒に染めし髪の手

熊坂 満

変りなき日々を過してありがたき
今日も夕の飯をたく湯気

岸部かずえ

日だまりの庭をせましと粃干の筵
の並ぶ秋の家かな

清水 幸治

現し世に墓より好きなものなしと
云ひ居し吾子に墓たてにけり

児島登喜子

まだ逢はぬ人の心とふれあひて歌
の世界の樂しかりけり

張山はるみ

秋深し家事をば終へて灯に坐り手
にとる絹の痛さ冷めたさ

徳永 真言

春なりき何かよきことあるごとし
心なごめりよく晴れにけり

山村 綾子

ほととぎすその紫の花故に秋風さ
へもしのびよるなり

山田 清子

白き船灯のあざやかに人影も異国
めきたるたそがれの海

堀江真鯉夫

何なくも債鬼に追はるる苦はなく
て心しづかに除夜の鐘きく

吉田 弘道

世の憂さを摩耶観音にあづけしも
坂は急なり人の世に似て

田辺獅子蔵

御法話をきかせいだく其の間世
事を忘るる心きよらか

石畠 俊徳

色あせし姿悲しき蟬のこのあと
幾日生きん命ぞ

吉末 林堂

雨はれて前田に霧のたち初めぬ夕
の鐘の遠く鳴りつつ

渡川 敬子

鈴懸の葉先を白く光らせて風吹き
すぎぬ夕さむき街

中川 誠一

長男の嫁にてあれば一入に荷は重
からん少しあはれに

川辺 つぎ

台風の眼に入りつればコバルトの
空見ゆひとと地はしづまりて

八島 美夫

エンジンのひびきもかろく安房峠
越ゆる行手は雲海の帯

葛岡 利子

窓越しにしづける雨を眺めつつ遠
足やめし授業つづくる

投稿規定

官製はがき一回二
首以内とし、「浄土」編集
部歌壇係あて住所氏名明記
の上送ること。

奮って御投稿下さい。

(元)

米、日本人は……と、よく口にす
るがこの例も、古くて新しい話の
一つであるが。

アメリカの生産性向上視察より
帰朝された人が、こんな話をしている。あ
ちらではどんな中小企業経営者でも、その
工場を案内する時、「よく見て下さいよ、
この発展ぶりを」と、マユをあげる。そし
て経営方針や、生産品について意見を堂々
と述べ、少しも卑屈なところがない。その
平素から張りつめた心構えには頭がさがっ
たというのだ。

この反語として出て来るのが「どうやら
その日をすごしている始末でして」等とい
う言葉だが。これは決して謙虚とはいえな
い卑屈さが、身についてしまっているよう
な、いやな感じのする言葉だ。物事は鼻に
かけてはいけけないが、「われらの特徴」「わ
れらだけで出来る面」にコウ然と肩を張っ
るがいい、もちろん日進月歩に遅れぬ勉強
を忘れてはならないが。

(祖)

国を遠く離れて、異国に生活して
いても生れた故里のことは、時お
り思い出すものらしい。年をとれ
ばとるほどに、故郷を懐しむ情が

深くなる。肉身のこと、幼きころともに遊
び、ともに語りし友のこと、そして山川草
木の自然風物がつよく甦ってきて、やるせ
ない慕情におそわれるという。こんな感情
は、海外生活しないものには一寸味えない
が、三十年、五十年異国に生活をした誰れ
しもが語ることである。しかし、かかる感
情も、交通機関の発達によって段々うすら
いでゆくという。昔ならば、一生に一度も
う再び会えない別れであってみれば、遙か
に思いをはせて懐しんだであらうけれど、
会いたいと思えば、何時でも訪れることが
出来る昨今の交通事情では、おのづと解消
していくというのである。さりとして、いく
ら地球がせばめられたからとはいえ、人を
愛し、物をいつくしむ感情には変りなきこ
と、機械文明の進展が、ヒュマニティーま
で失うことはあるまい。

(法)

律というものは人間が作るものだ
が、一度それが作られてしまふ
と、今度は逆に、人間を苦しめる
ものになりかねない。人造人間
が、自分を造り出してくれた人間をしめ殺
ろすような結果になりかねない。

警職法は、そうした危険を予想した人々
の反対にあつて、お流れになったのだが、
お流れにするのに、大変なさわぎがあつた
のだから、全く以つて、法律というものは、
生まれる前から人々を苦しめるもので
あるらしい。

なぜ、法律とはこんなに厄介なものであ
るのか。それは結局、人間が人間を律しよ
うとするからであり、しかも、律する方の
人間に基だ公正でない色合いの濃い場合が
多いからである。それに引かえて、仏教で
いう「法」は、そんなケチくさいものでは
ない。永遠不易の大真理のもとに出来てい
るのだから、ひもつきでも傾向的でもな
い。だから、この方の「法」は人を楽しま
せ、人を喜ばせよ。法のままなる「法然」
こそ、人間の真の姿となる。

(T)

(A)

(N)

(然)

という字で書き出す為に考えた末、という事は苦肉の一策ではあるが、然……から始って、日月皎然・死灰復然とおよそ百二十ばかりの熟語の中で上に然が付くのは、然否・然諾・然鬚・位のもので他はすべて、下に然が付く事を発見？して、我が頭をなくさめた。

仕方がないのでという事も口実ではあるが、参考までに、然の語義を左に書き取って見た。

①火熾る、ほのは立つ、もゆ。②ゆるす③しかり、此の如し。④らよう。……となっていて、すでに皆様も御承知の通りのこと。然し、上に然が付く先述の熟語の解釈は、我が身にことえたので列記して見ると、然諾Ⅱ一旦、人に許諾した事は必ずこれを履行すること。

然鬚Ⅱ度量の寛弘なことをいう。

としてある。論語読みの論語知らずの例ではないが、暇があったら、語義を見ることが無駄ではない。

(T)

(上)

を下えの大騒ぎを演じて、主流だ、反主流だといがみ合い、おのれの寿命をちぢめているより、不老長寿のことでも考えたらどうであらう。

「長生きしたければ歩け、いや走れ。我々に足があるのは、テレビの前に座るためだけではない」と忠告する人がある。ただし日本ではなく、アメリカの話である。それによると、(一)、四十歳を越えたら精密な健康診断をうけること。(二)、毎日一回は強歩を試みることに、散歩では意味がない。(三)、定期的にバトミントン、テニス、スケート、水泳などの運動をすること。等である。心臓や、循環機能は、ときどき刺戟しなければ、弱まる一方である。「毎日歩く機会のない人は、電車やバスの停留場までちょっとでもいいから、走ることもよい」という学者もある。ことに都会で、乗物しか利用しない人達は、一日にどれだけでも、歩け歩けの習慣をつけることが望ましいことである。

(A)

(人)

の命ははかりがたい。生れるのも、死ぬのも、自分の意志ではどうにもならない。もっとも生まれるのは、自分というものがまだはつきりしてないのだから、思いどおりに生まれられぬのもやむを得ないが、せめて、死ぬのくらは、自分の好むときに死にたいものである。その点、西行法師は、さすが風流の道に徹した人だけあって、自らの思いをとげて亡っている。本月の十五日が西行忌であるが、その歌に願はくば花のもとにて春死なん

その如月きさらぎの望月のころ

とある。

鳥羽上皇に仕えて北面の侍となり、弓をとしては当代一といわれた佐藤憲清が、身を雲水に托して極め得た諦念の滴りあふるるばかりの歌である。

釈尊の入滅と日を同じくし、早春の花がぐわしき日に静かに去った西行の一生に、素直おな崇敬を捧げたいものである。

(N)



眞理の花たば

——若き女性への仏教入門(二)——

佐藤良智

第二講

清きこころ

純潔な若き女性の最も願わしいものはなんであろうか。

私は知っている。

“清きこころ”

それであろう。

夢多くして

ただ、清らかなるものを憧れて、こころがせつない。

青苔の静もれる山庭に

ただ一輪咲いた

赤い椿。

この美わしさが、若き女性のもとめる清らのところである。

世尊、ぶつだは申された。

“もろもろのあしきことを、作さされ

善きことをのみふみ行ふべし。

ああ

をのが、こころを、清めること、

これこそが

もろもろのみほとけのみ教えである。”

世尊ぶつだのみ教えは、高く、深い。しかし、人間のことばをもってあらわせば、このおんことばにつきるであろう。

今や、人類は平和を求めて悩み多い。ことごとに対立はは

げしい。なにか地球が二つに、われてしまいはしないかとさえ思われる。二つの世界。民族と民族。国と国。争いははてしもなく続く。人類の裏側に、戦争がひそんでいるというおびえが、誰人もの心の底にひそんでいる。

生けるものをあやめることなかれ。

これが第一のいましめである。あやめることは、悪の最もたかきものである。地上を平和の楽土にするには、いのちを尊ぶことが第一である。いのちは地上の花だ。いのちあるもの、みなその花をひらき、その花の色の光あらしめなければならぬ。

地に平和あれ。

地にいのちの光りあれ。

与えられざるものを、己がものとする事なかれ。

自らのいのちは与えられたものである。この与えられたいのちをいとおしもう。

このいのちをおろがむものが、みほとけをおろがむものだ。

与えられたいのちが尊いと共に、与えられたもろもろの、もちものも尊い。しかし、与えられない他のもちものを、己がものとしてはならない。このことを世尊は厳としていまし

め給うた。

ただ、しかし、人々はこのことを深く思うべきではないか。いったい、地上の富は誰のものであるのか。たれか一人のものではない。数人のものでもなく限られた人のものでもない。深く深く思うべきである。世尊ぶつだは、「ふせ」を説かれた。「ほどこし」を説かれた。富は平等に流れることがその本来のすがたである。高いものが低いものに「ほどこす」のでは断じてありません。「施」は平等への門だ。絶えざる平等！

これこそ人類の永遠のねがいです。

男性よ、女性よ清純にあれ。

第三のいましめである。

地上にをみなあることは、美しく尊い。若き女性は、地上の花であるとわたしは言った。老いも若きも、おしなべてをみなは、美しく、尊い。母なれば更に尊い。

人と生れくれば、家庭をつくらなければならない。家庭をつくれれば、その家庭は清純でなければならない。家庭の純化をこそ、世尊は尊ばれた。

わたしはここで、世尊ということばについて述べておきたい。世尊とは釈迦むに如来のよび名である。

世間にあって、こよなき尊きもの。それがよび名である。

世間。そうです。人の世の外の、どこでもない。天上でも、地下でもない。この世の尊きものでまします。そのよ
うな意味です。この世は、女性と男性の、住む世です。生活
する社会です。社会は家庭によって構成されています。一応
は個人が単位ですが、自然な、豊かな、美しい単位は、清純
な家庭でしょう。この世間で尊ばれるぶつだが男性と女性の
純潔をさけび給うことは、なんと真実であって、尊いことで
ありましょう。女性のふくよかな愛情、香り高い情熱。それ
が、たくましい男性の意志をつつみ、はぐくみ乱れない。男
性は毅然とし、そして、乱れない家庭の重石、世尊の純潔を
さけばれるのはこのことです。

若き女性が清純と離れてどこに誇りがありましたらう。

言葉よ、美わしくあれ。

妄言よ、両舌よ、去れ。世尊は、ことばを重ぜられた。こと
ばは、このころのかがみである。美わしいことばは、美わしい
心にかたられる。ことばを慎むことはなかなか難い。難きを
行うが善である。仏典に、和顔愛語、ということばがありま
す。わたしのすきなことばの一つだ。

ほほえみつつ、愛しき言葉を

かたる若き女性よ

君は

かんぜおんぼさつだ。救世かんぜおんだ。

愛の星だ。花だ。

酒によいしれるなかれ。

世尊は、飲酒の慎しむべきことを強くのべられている。な
ぜか。酒そのものには何のともない。しかし、世尊の最も
大切にし給う、人の知性を失わせるために、飲酒をいましめ
給うのです。知性こそ人の宝だ。たからを重ぜざるものは亡
ぶ。

わたしは、ここで悪をかぞえ、善をのべることをひとまず
やめよう。

むさぼり。

いかり。

ぐち（愚痴）

世尊のかたく、いましめられた三つの毒についても、語る
のをやめよう。

なぜならば、

をのが、こころを、清めること。

この第三の句に、強く、こころをひかれるからである。こ
れが悪をやめ、善を行ふすべてである。この講において、
“清きこころ”をとりあげた。

自らの、こころを、きよめること。なんという美わしいこ

とばであろう。清らかな石清水のように尊い。ぴかり、と眞実を、眼前に、みる思いです。

眞実には、本来、わたしたちのころは、清淨なのであります。

仏典に、自性清淨心、ということばがあります。わたしどもものころは、うまれつき、清らかなのです。清淨なのだ。うまれつき清らかなころを抱いている。私達は幸福です。仕合せへの道を本来、もっているのです。

ころを清めることは、自らに帰えることなのだ。本来のすがたにかえることです。

清淨心はころの母

ころの母にわたしたちは帰ろう。

地のけがれ

ころのけがれを

ぬぐいさり

清らかなころのふるさとに

かえろう。

仕合せは

ころ清きものにある。

世尊は尊くも、自淨其意を説き給うた。ふみ行うべき尊きことばである。

(筆者・大正大学教授)

— 二月の経文 —

足る^たを知る人は、地上に臥すといえども
なお、安樂なりとす。

足るを知らざる者は

天堂に住めども 心満足せず

足るを知らざる者は

富むといえども しかも貧しく

足るを知る人は

貧しといえども しかも富めり

— 仏遺教経 —

お日さまの子

童話



きりぶちてるを
えかとうさんいち

「一」 プロローグ

こんもり山の かあさんがらすには、七つになる 子 がらすがいました。

ですから、かあさんがらすは、遠い町や村へ 朝早くから とんで行くと、一日中まっ黒になって えさを集めては、夕方 子 がらすの待っている こんもり山に帰ってくるのでした。

カーオ カーオ カーオ

「さあ、ぼうや。さびしかったでしょう。そのかわり、きょうは こんなに すてきなごちそうを 持って来てあげましたよ。」

強い風のあたらない 松の枝の家。

かあさんがらすは 子 がらすを見ると、くたびれたことも忘れて、黒いほっぺたを 子 がらすの顔に くつつけるのでした。

早くなれ。早くなれ。

大きくなれ。大きくなれ。七つの子。

「二」 すずめの話

かあさんがらすが 病気になりました。ぐったりと松の枝の家に ねたっきり。こ

れでは、 たべものに こまります。

かあさんがらすも 子 がらすも だんだんやせるばかりです。

「こまったねえ。かわいそうな ぼうや。近所で木の実でも ひろっておたべ。」

子 がらすは、こんもり山の あちこちを とびまわりました。

木の実。草の実が たくさんあります。けれども、どの木にも どの草にも、ちゃんと

『もずの えさ』とか、『あたしの物』とか、

『とったら いけない』なんて、ふだが立っています。おちて ころがっている実なんかありません。

子 がらすは、しょんぼりと 枯木にとまって考がえました。

すると、チュンチュクチュンと おおぜいの すずめが とんで来て、となりの木にとまりました。

「どうだい。何か面白い話はないかね。」

「あるんだよ。あのね。人間が この こんもり山に くるんだってさ。」

「おや。なにしにだい。」

「うん。えさを まいておいてね。ぶっぼう

そうを よびよせるんだって。」

「ふん。ふん。それで。」

「ぶっぼうそうのなく声をきくんだって。」

「なーんだ。つまらない。ぶっぼうそうの声を

ただ きくだけか。」

おしゃべりすずめは これだけ話すと、ま

たどこかへ とんで行って しまいました。

子がらすは、この話を ききました。

「人間が えさを まいて、ぶっぼうそうの

声を きくんだって。うん。そうだ。ぶっぼ

うそうの おぼさんに たのんでみよう。」

こう考えつくと、いきおいよく とびあが

りました。

〔三〕 ぶっぼうそうの話

ぶっぼうそうは どこに いましたか。

くらい木の ほらあなで、ひるねをして

いました。

バサバサバサ バサ

「お、おぼさん。おぼさん。たいへんだよ。」

子がらすは ハーハー いきをさせて、ぶ

っぼうそうの おぼさんをおこしました。

「なんだね。せっかく ねむっていたのに。」

「だって、おぼさん。人間がね。この山に

くるんだよ。それでね。えさを たくさん

まいて、おぼさんの ブッポーソーって な

くのを きくんだってさ。」

「それが どうしたって いうんだい。」

子がらすは、あわれな声で たのみました。

ぶっぼうそうは 顔を まっかにすると、

「何をいうの。まったく ばかにしている

よ。」と、ふんぶんおこりだしました。そして、

「だいいち、あたしが ブッポーソーだなん

て なくと 思っているの。」

と、いつてから、

「ギヤッ。ギヤッ。」

と、ないて みせました。

子がらすは びっくりしました。

「いくら名前が ぶっぼうそうだからっ

て、ブッポーソーと なくとは きまっ

て いるんですか。それに なによ。

ひとを なかせておいて、自分は何もし

ないで、えさを たべようなんて。まっ

たく あきれた からすだよ。さっさと

お帰り。お帰り。」

ぶっぼうそうは、くるっと むこうを

むいてしまいました。

しかたがありません。子がらすは かあさ

んがらすの ねている松の枝に 帰って行き

ました。

夜になって、かあさんがらすの横に ねて



も、子がらすは ねられません。それでも、そっと 目をとじました。

〔四〕 このはずくの話

ブッポーソー ブッポーソー

子がらすは、はっと目をさました。

どこかで、だれかが、ブッポーソーと な
いています。じっと 耳を すました。

「よし。あの声のするほうへ 行ってみよう。」

子がらすは、かあさんがらすが 目をさ
さないように 気をつけて、そっと 家を出
ました。

まっくらな こんもり山です。ミルク色の
もやが カーテンのように さがって、一メ
ートルさきも わかりません。

子がらすは おなかの すいたことも わ
すれ、目をできるだけ 大きくひらいて す
みました。声のする ほうへ。

その時、ブッポーソーの声が ぶつんと
きえてしまいました。

せっかく もう ちよつとで、声のする所
まで行けたのに。これでは だめです。

子がらすは べそを かきました。

「ブッポーソー。ブッポーソーの おじさ
ん。おぼさーん。」

と、思わず おろおろ声で さけびまし
けれども、「なんだーい。」って 答えてはく
れません。

「おかあさーん。」

今度は ポロポロと なみだを流して、思
いっきり さけんでみました。

すると、子がらすの 目の前に、ふくろう
に似た このはずくが、ぬーと 出て来て、
「何か用かい。この私に。」
と いいました。

耳の ぴんと立って、目の するどい こ
のはずくの ようすに、子がらすは びくっ
と からだを ちぢめました。

「おや。君は からすの ぼうやらしいね。
まいごにでも なったのかね。」

「ち、ちがうんです。ぼく。ブッポーソーっ
て なく鳥を さがしに来たんです。」

「ほほう。ブッポーソーと なくのは、この
私だよ。このはずくだよ。」

「えっ。おじさんだったの。ないたのは。」

よろこんだ 子がらすは、すずめや ぶつ
ぼうそうの話を しました。

だまって きいていた このはずくは、

「よくわかったよ。だが、自分が何もしない
で、ごちそうだけ たべるのは いけないこ
とだよ。そんなことをしたら、君の おかあ
さんだって かなしむだろうよ。」

と いったから、

「いいかい。からすはね。朝は お日さまに
むかって とんで行って、夕方には またお
日さまのほうへ 帰って行くものなんだよ。

そうだ。お日さまにむかって とんで行ける
のは からすだけだよ。だから、お日さまの
子なんだよ。お日さまの子が おなかがい
たからって、どろぼうみたいなことを する
のは いけない。そうだ。ちよつと 待って
おいで。」

こわい顔をしていても、親切な このはず
くです。

袋に とうもろこしの種を いっぱいいれ
て 持ってくると、

「お日さまの子や。さあ、この ごちそうを
あげるから、おかあさんと おたべ。そして

お日さまにむかって とんで行ってごらん。
きつと いいことが あるにちがいないよ。」
と いいました。

子がらすは、なんだか 夢を見ているよう
な気がしました。しかし、背中には とうも
ろこしの袋が ずっしりと乗っています。

松の枝の家に 帰ると、おかあさんに 今
までのことを話しました。

「そう。このはずくの おじさんが そう
おっしやったの。『からすの 子わかれ』と

いってね。いつかは ぼうやも

おかあさんから はなれて く

らさなければならぬんだよ。

もうすこし 大きくなってから

と 思ったけれど、それでは

お日さまにむかって まっすぐ

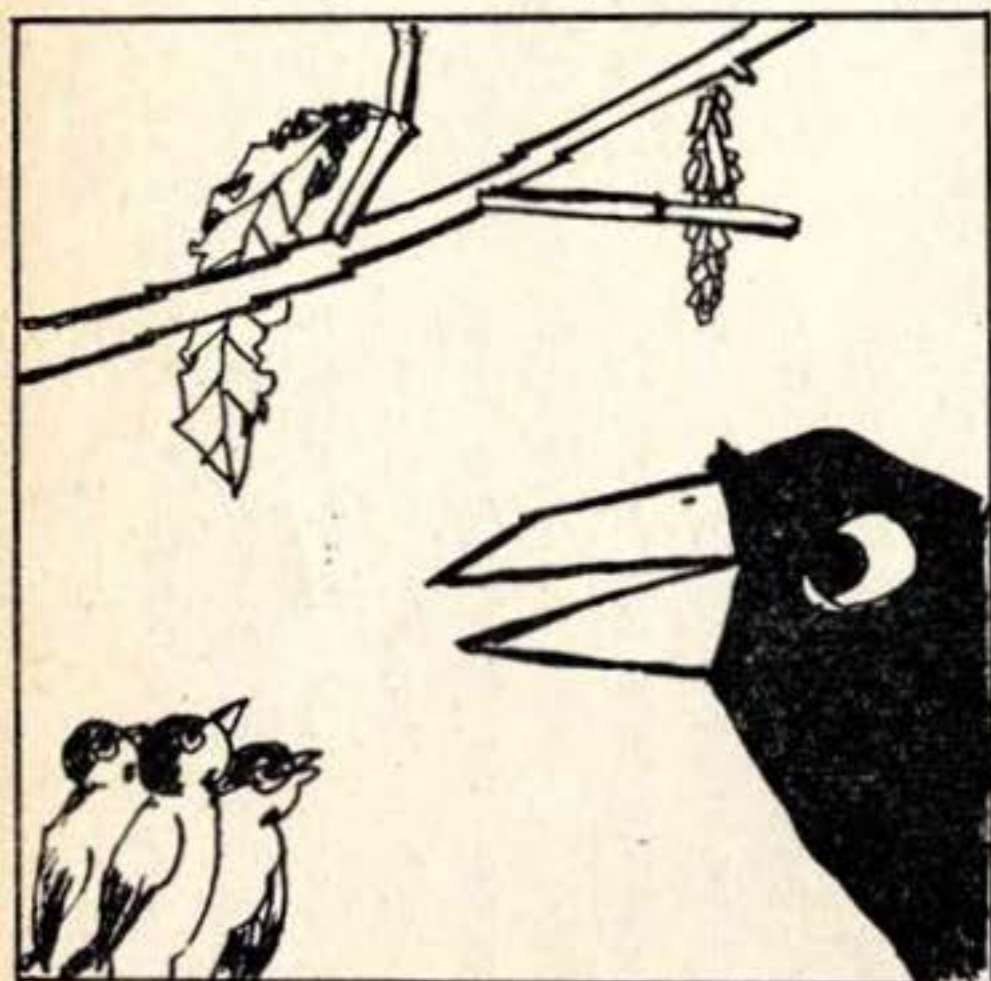
に、ただ まっすぐに とんで

行ってごらん。」

かあさんがらすは、子がらす

のほおに、やさしいキッスをし

てやりました。



〔五〕 白い からすの話

子がらすは、お日さまを目ざして どん
と とびました。

「ぼくは お日さまの子なんだから、いつも
お日さまが まもっていてくださるんだ。」

と、ひとりごとを いいながら、とんで と
とびつづけました。

ずいぶん行ったところ、むこうに 大きな森
が見えました。

「あそこ

で ひと

やすみし

よう。」

子がら

すは 森

につくと

一本の木

にとま

りまし

た。

カーオ

カーオ

カーオ

おや。なつかしい からすの声がします。

子がらすは むねがドキドキしてきました。

「おや。若い からすだね。どこから来た
の。」

ごましお色の おばあさんがらすが とん
で来たのでした。

「はい。こんもり山から 来ました。」

「そうなの。ごくろうさま。こっちへ おい
で。」

おばあさんがらすは、子がらすを 森の奥
へ つれて行ってくれました。

静かな森です。まるで湖の底にいるようで
す。いえ、そればかりでは ありません。ど

の木からも 香水のような よいにおいが

会員各位にお願い

1 会員五名以上で支部をご結成下さい。

2 支部には、支部拡張用としてお申し込
み次第無料で見本「浄土」をお送りし
ます。

3 支部には、毎月浄土を一冊贈呈しま
す。

しています。

そんな森の奥の 白樺の枝に まっ白な
からすが一羽 とまっています。

「お前は いくつだね。」

白い からすが ききました。

「はい。七つです。」

「そうかい。ここへ来たわけを 話してごら
ん。」

子がらすは、また 今までの話をしました。

「なるほど。それでは このバッジを おか
あさんに持って行ってあげ。そして、ここ
に くるようになってな。」

白い からすは、金色のバッジを 子がら
すに渡しました。

「でも、ここには何があるんですか。ぼくは
こんもり山に帰って、おかあさんを大事にし
ようと 思っているんですけれど。」

「いやいや。ここはな。一所懸命に働ら
い、働らくことを卒業した からすたちが、
いっしょに仲よく集まって やすむ所なんだ
よ。見てごらん。みんなバッジをつけて い
るだろう。バッジをつけている からすは、
今いったように 世の中のために働らいて来

た、御苦労さまの からすばかり。わかつた
かい。お前は若い。おかあさんのように せ
い いっぱい働らいてから ここにおいで。」

白い からすの言葉に、子がらすは あた
りを見まわしました。

まっ白な からすや、半分白くなった か
らすたちが、にこにここと 子がらすを な
が めていました。

「わかりました。急いで家に帰って、おかあ
さんに このバッジを渡します。ぼくは、ぼ
くは お日さまの子なんです。一所懸命に働
らきます。」

子がらすは にっこりと わらって、白い
からすに ベコンと頭をさげました。

〔六〕 エピローグ

子がらすは いつまでも 子供ではありま
せん。七つの子は いつまでも 七つの子で
はありません。

もっと、もっと、大きくなって、およめさ
んを もらってから、まぶたの奥に きょ
うのことを たいせつにしまっておいて、き
っと思い出すことでしょう。 (おわり)

新会員紹介(1)

神奈川	千葉	長崎	東京	京都	山形	長野	神奈川	〃	〃	茨城	宮城	福岡	福岡	神奈川	青森	山形	〃	〃	秋田	三重	
瀬高宗尊	河村統宗	磯田真戒	靈性院	増田せい	浄光寺	法樹院	林田智源	柴田敏夫	片倉鉄雄	小野すま子	正定寺	新保瑞聖	長楽寺	長泉寺	森秀雄	川越兼章	斎藤英明	来運寺	善正寺	橋爪留三	小林卯一郎

勸募日記

法然上人鑽仰会が創設されてから、二十数星霜の歳月が流れた。その間、時代はいくたの変遷をとげて今日に至っている。本会が創立された時代を考えてみると、思想、道義の

情熱と、法然上人の偉大なる芳躅を慕うつき確信のみが支えとなつて、いくたの試練を経て今日に至っている。

混乱とそれに併せて経済的不況にともない、庶民の不安はつのるばかり、宗門にあつても、また道標をうしない退嬰的風潮が澎湃として興りつつあつたとき、かかる時代風潮の危機意識を敏カンに感じとつて、大旗をかかげられたのは真野正順氏であつた。しかし、

いま、わたくしたちは、きわむれば、きわむるほど、こんこんと湧き出づる泉のごとく、その深さをしらぬ上人の偉大性を、ひとりでも多くの人びとにわかちあたえて、人生に平和と安寧が訪れんことを念じて、此のたび、広く本会維持会員をもとめることとした。

時代の流れに呼応して、帆をあげたとはいへ、かならずしも春の海をゆくような、快テキな道程ばかりではなかつた。数おおくの困難がふりかかつてきた。その中で、志を同じくするものが、ただ真理を求めるひたむきな

そのため、わたくしたちが、足を棒にして歩いてみて、実際にこの目で見、この耳で聞くところ、そこには、強き信仰にみちびかれて、大地深く念仏弘通の種がおろされ、着々教化の実をあげている、生きた信仰の姿をみ

ることができた。それは、志を同じくする者にとつては、かけがえのないうれしさであつた。

○

宗門さかんなりし頃より、革新的ノロシはいつも深川方面よりあがつたと聞く。その噂さのごとく、深川の各寺院は内外共に整備されており、活気にあふれていた。

大御所、心行寺、鈴木在念僧正のお智慧を拝借して、まとまりよい成果をあげ得たことは有難いこと。鈴木在念僧正はいうまでもなく、大本山増上寺執事長、山椒は小粒でもビリリのたとえは、この師のためにあるようにさえ感じられる。五尺そこそこの体軀とはいへ、眼鏡を通した爛々たる眼ざし、真白い顎ひげをなでながら語る風ボウは、人生の甘いもカラいもかみわけた、カンロクは充分である。かつて、浄土宗議会名議長として、その敏腕は大いに讃えられたものである。とくに最近のごとく、むづかしい宗門の動きに対しては、宗政面を一途に歩まれた経験豊かな師の発言は、よきシサをあたえ、傾聴に価するものがある。

宗門の動きのむづかしさといえ、宗門行政を司さざる御仁は更に大変のことである。しかも、局面が困難であればある程、その地位にある人の責務もまた重大である。当局の庶務部長といえ、云わずと知れた、福田稔界師その人である。師の自坊は深川の正覚院。かつて増上寺財務部長として、本山復興のために陰の力となって働き、とくに、法主が、結縁のためアメリカに渡られた折も、一入陰に陽に細部にわたり配慮したのは稲田師であった。有髪で、そぞろロマンスグレーがかった髪をきしりと手入れし、温い眼ざしで語る師は、全く扶香臭さが無い。話題は豊富で、企画、経営的面における才は得がたい。宗門人にはめづらしく近代的センスを身につけている師に、今後の期待は大きい。

寺門の興亡は、もとより、その住職の徳、不徳によるのであるが、といって、現代のごとく、生活が忙しくなってくると、ただ山にのみもっているような、消極的な在り方は、社会がゆるさなくなるだろう。積極的に社会との交渉をもたねばならない。所謂、よい意味の経営的才能がなければ、いまの如き

時代にはおくれをとってしまう。その点、深川という処は、そのしめる地位がそうさせるのであろうか。寺院が積極的に事業経営に参画している方が多い。雲光院といえ、御承知のように地方から来る人人の便宜をはかつて、団体等の宿泊所を提供している。殊に寺でなければ味えぬ静かな雰囲気の中で、不案内な地を訪れた人々に、温かい親切の心を運んで、旅情を慰めることをモットーに、津々浦々から訪れる人々に仏縁を結んでいる。住職服部覚善師は、最近健康に恵まれないが、求道のつよき心は変わらず、永年続けている早起き会を、いまだにつづけていると聞く。不自由な体をおして、朝未だ明けやらぬ晏朝に、参詣の人々と共に出勤めし、法を説くすがたは何より尊い。求信の情熱は、宗門の若き人々の範たるものがある。

服部師の宿泊所に対し、長専院では、念珠、仏具その他、荘厳具の便宜を計っている。「信は荘厳より」という言葉は、古くして味い深い。とくに過渡期の様相を呈している昨今、ややもすると荘厳ということにデタラメになるキライがある。広大にして、華美

でなくとも、仏に対する最上の敬虔さをこめて、整然とした荘厳が要求される。住職正本実乗師の徳のいたすところ、本堂は立派に荘厳がゆきとどいて、知らずのうちに敬ケンな気持ちに襟をたたしむる。さらに、内助をつとめる令夫人の寺庭婦人としての才を見逃してはならない。

この長専院の前は、名利、道本山靈巖寺である。かつては内外共備した名利も、戦災にあい、すっかり灰燼に帰してしまった。しかし、住職、伊藤智源師の一念發起のねがいは、れいがん幼稚園となり、れいがん眼科診療所となってあらわれた。完備した幼稚園からは、健やかに育てられた園児の明るい歌声がひびいてくる。それは、ちょうど、若草が萌えいづるようにすくすくとのびていた。伊藤智源師は、学僧であり、現在大正大学教授として、倫理学を講じて居り、その名講義は定評がある。飾り気はなく、一見、禪僧を思わせる風力クは厳しい求道のたまものか、益々円熟味を加えてきた師の活ヤクは期待されてよい。

支部通信

東京 伝通院(三五名)

代表者 大河内隆弘

東京 西福寺(十五名)

代表者 成田 良穂

東京 講安寺(三十名)

代表者 池田 立基

東京 雲光院(二十名)

代表者 服部 覚善

東京 重願寺(二十名)

代表者 大谷 玄瑞

東京 心行寺(十名)

代表者 鈴木 在念

東京 明福寺(十名)

代表者 福井 豊信

東京 長専院(五名)

代表者 正木 実乗

東京 法性寺(五名)

代表者 広本 徹隆

東京 円通寺(五名)

代表者 後藤 真雄

東京 正覚院(十名)

代表者 稲田 稔界

東京 靈巖寺(五名)

代表者 伊藤 智源

東京 正覚寺(五名)

代表者 鈴木 義宏

東京 昭善寺(六名)

代表者 田丸 徳成

東京 浄心寺(十名)

代表者 小池 政雄

東京 厳浄院(五名)

代表者 鈴木 俊善

東京 行安寺(十名)

代表者 鈴木 靈孝

埼玉 円心寺(二五名)

代表者 石田 正信

茨城 常林寺(一五名)

代表者 石田 正信

大阪 大光寺(二十名)

代表者 三枝樹正道

広島 浄国寺(二五名)

代表者 三枝樹正道

京都 家政学園(十二名)

代表者 田村

福井 善導寺(三十名)

代表者 大門 俊我

長崎 専念寺(二十名)

代表者 大門 俊我

長野 呈蓮寺(五名)

代表者 横内 浄音

〃 善法時(五名)

代表者 石川 清美

青森 青岩寺(七名)

代表者 石川 清美

新規会員紹介②

青森 専求院

東京 良感寺

神奈川 伊香輪政徳

島根 三谷勘二郎

愛知 伊藤正穂

京都 樹下隆昭

島根 石村静子

兵庫 甘露寺

千葉 今井禅恵

静岡 服部基久次

群馬 工藤健山

栃木 長田善弘

広島 佃 真善

福岡 竹尾真誠

秋田 宮原真誠

〃 往生院

宮城 中沢円浄

福島 大島浄照

岩手 大念寺

長野 西楽寺

北海道 円光寺

青森 水野益栄

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料不要)

浄土 二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年一月廿五日 印刷

昭和三十四年二月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹中 信常

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人顕仰会

振替東京八二一八七番

御袈裟法衣御調進

○錦 金 欄

○特種織物

○御 水 引

○御 打 敷

○御 幡

○稚児衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚
児貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺
宗務所
大正大学
芝中高校
淑徳学園

御用達

東京都港区西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

東京高等保育学校長
駒沢大学文学部講師

内山憲尙著

B 6判一六〇頁
予価 一八〇円

送料 三〇円

仏教保育二十章

— 図解・仏教保育の理論と実際 —

内山先生は東京高等保育学校、聖美幼稚園などの経営にあたり、多年、実際の仏教保育を通じて、指導理念をつかみ、それを実践されてきた方であります。本書の執筆は、六・七年前より計画され、長い間資料をあつめ想を練つた上、このほど脱稿をみたものであり、幼稚園、保育所が数においては老大なものになつたにもかかわらず、適切な保育指導書を欠いている今日、まことに時宜をえたものと思ひます。

何卒、御一読をおねがい申し上げます。

(付録)

一、幼稚園関係法規

教育基本法、学校教育法抄、設置基準法

二、保育所関係法規

児童憲章、児童福祉法

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

申込先

青山書院

振替東京九九三〇三番